

会津人群像

aizujin 季刊 gunzō

2010
no.16

蘇生白虎隊士

59 飯沼貞吉の生涯

飯沼 一元

94 エピソード 滝沢 洋之

連載 京都守護職の苦悩

96 「真の尊王」と「偽の尊王」

鈴木 荘一

戊辰戦争が残したもの

104 萩地方に伝わる『白河踊り』

滝沢洋之・中原正男

会津の古刹 ふれあいの旅⑨

110 興雲山竜門寺（会津美里町尾岐窪）

川原 太郎

112 会津におけるボランティアガイドの活躍

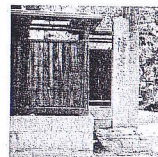
大川原史郎

—— 鶴ヶ城ボランティアガイド ——

稽古堂秘話

120 横田三友斎俊益の行跡と風華

酒井 哲也



蘇生白虎隊士

飯沼貞吉の

生涯



飯沼貞雄肖像画

飯沼 一元

はじめに

私は飯沼山で自刃した白虎隊士の中で、一人だけ生き残った飯沼貞吉（後貞雄に改名）の孫に当たりますが、ここにその生涯について寄稿する機会が与えられた。事件以来一四一年も経て、「今頃何故だ？」とよく聞かれるので、まず、その理由をご説明しておく。

一つは、飯沼山には年間一〇〇万人もの人が訪れると聞かすが、飯沼に関する史跡ガイドの方の説明には、史実と異なる内容が含まれていることに気付いたことである。

これは飯沼家がだんまりを決め込んでいたのだから仕方がない。飯沼家では白虎隊の話はタブーで、家の中で話題にすることは殆どなかった。白虎隊の話を書いたが人は結構いらしたが、みんなお断りしていた。新聞やTVが取材に来ると母がいやな顔をして、やむなく応対していたのを覚えている。小学校（仙台市）の遠足先は福島県の会津に決まっていた。コースには磐梯山や五色沼に加えて、飯沼山が入っていた。事前学習が始まると、私の正体がバレてしまい、翌日、黒板に大きく「わざとあつさり喉を突いた」などと落書き

きがあり、イジメの対象にされた。

そうした背景の中で、貞吉のことをよく知る機会もなく過ごしたが、インターネットが普及し、郷土史研究家の手で情報が発信されるようになり、貞吉が喜多方沼尻にある不動堂で一ヶ月近く隠棲していたことが分かった。現地を訪ね自分の目で確認し、一九九九年十一月におくればせながらお世話になった人々への感謝と歴史の記録として、貞吉の碑を建てた。この頃から暇を見つけては貞吉の調査を開始したが、ネット上には貞吉に関連する沢山の情報が掲載されており、史実解釈に混乱があることがわかった。その原因の一端は飯沼家の「無言」にあることは明らかである。

二つ目は、貞雄直筆の新文書が発見されたことである。二〇〇八年六月に那須塩原市に住む飯沼一浩家から『白虎隊頼末記』と『白虎隊の人員』という二つの古文書が見つかった。そこには、これまでの白虎隊定説とは異なる記述や自刃の当日行方不明になったとされる白虎隊長日向内記に関する情報が含まれていた。これらの新文書を分析することで、史実をより明確にすることができ、その一部は『白虎隊の戦闘行動と飯沼山自刃の決定プ

ロセス』と題して、別稿とした。

三つ目は、貞雄の生涯を調査していくうちに、貞雄が「隠された歴史の証言者」だったことが判明したからである。これは、日向内記の斗南救援工作と会津藩の埋蔵金に関するこれまで殆ど知られていなかった事項である。いずれ、別稿にまとめる予定であるが、その情報の一旦を握っていた貞雄の生涯を明らかにしておくことが、何かの役に立つかも知れないと考えるからである。

二、飯沼家および調査の方法について

一 飯沼家のこと

飯沼貞吉は会津鶴ヶ城郭内、大町通本二ノ丁と本三ノ丁との中間西側の屋敷で、時衛（後猪兵衛）一正の二男として嘉永七年（二八五四年）三月二十五日に生れた。家の世禄は四百五十石で、父の妹千重子は家老西郷頼母に嫁し、戊辰八月二十三日に一家二一人と共に自刃し、なよたけの碑の主人公となつた人である。一正は白河戦では朱雀隊中隊

長で、その後、青龍一番寄合組の中隊長に変わった（『補修会津白虎隊十九士伝』、宗川虎次著、山川健次郎監修）。一正が白河戦で西郷頼母総督の側近として出陣し、西郷が死を決して敵陣に突入しようとしたとき、これを諫止し、馬の尻に鞭打って退却させたとい

う話がある。この時、一正の弟三郎は戦死し、軍事奉行だった海老名李久は責任をとって自刃した。一正の叔母なおは李久の妻である。

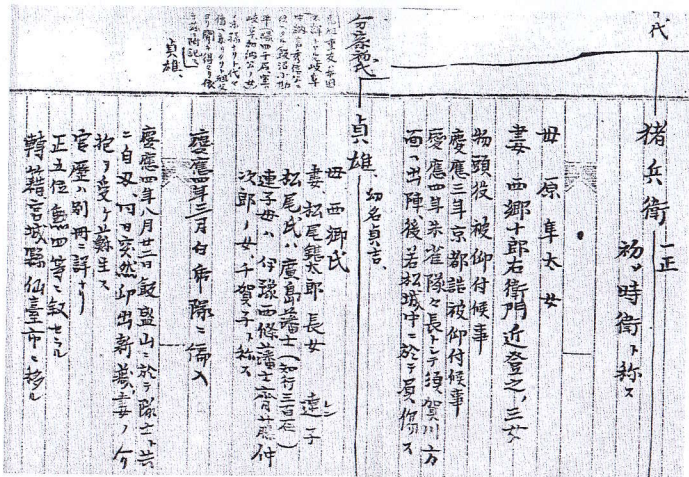
一方、母ふみ（雅号玉章）は本三ノ丁北側、世禄三百五十石、西郷十郎右衛門近登之の

三女で、長女えん（雅号唐衣）は山川浩や健次郎の母である。二つの西郷家は保科民部正近を祖として繋がっており、三代目西郷頼母近房から分家して五代目が近登之で、本家一一代が家老頼母近慮である。このように、飯沼家は二つの西郷家を親戚として、恵まれ

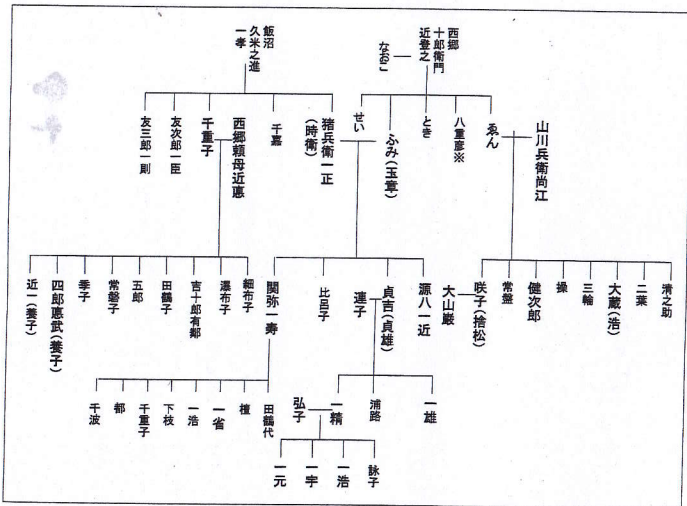
た人脈の中で生きてきた。

貞雄の兄源八一近は朱雀隊に所属し、妻は萱野権兵衛の二女いし、妹は比呂子で会津藩士飯河知記に嫁し、九歳下の弟関弥一寿は会津藩士西岡連太郎の長女とよと結婚し、明治三十二年（二八九九）から二三年間に亘り松平家の家令（執事）を務め、その後、山川健次郎らが手がけた『会津戊辰戦史』の発行人となつた。

飯沼家は代々男子は「一」をつけているが、貞雄だけは例外である。「家名を汚した」との思いがあつたのではないかと推察する。貞雄には三人の子があり男子は「一」を付けている。長男一雄は日露戦争帰還後まも



貞雄直筆の家系図



飯沼、西郷、山川家系図

なく札幌で病死し、長女浦路は会津藩士松田一雄に嫁し、貞雄が仙台通信管理局に転勤になった明治四十三年以降は仙台で貞雄の近くで過ごした。二男一精は明治三十年生まれで結婚は貞雄の没後の昭和十年。一精には三男一女あり、筆者は三男。飯沼家の男子は今のところ、五代目まで全員「一」がついている。

二 調査の方法について

調査は文献と現地訪問だが、夥しい文献の中では古いものをより重視した。参照文献は本稿末に示す。また、貞雄のインタビュ記事は重視したが、当時のインタビュでは口述を記事化したあと、ゲラを本人に見せて校正するという手順は踏まなかったと考えられるので、記者の誤解が含まれている可能性を考慮した。また、同じ事件に関して複数の文献がある場合は、比較して共通事項と非共通事項を整理した。有力文献を五つ挙げるとすれば、①『白虎隊顛末記』（明治二十五年、明治三十七年）、②『白虎隊事蹟』（明治二十六年、二十七年）、③飯沼貞雄談による『白虎隊実歴談』（明治四十三年）、④『白虎隊の人員』（大正六年）、⑤『藻汐抄』（昭和十三年）である。

現地調査は文献とは全く次元の異なる迫力がある。特に墓碑や自刃の図は動かしようのない歴史の証明である。また、口伝は誰が何故伝承してきたかという背景を勘案して検討に加えた。

飯沼貞吉の生涯概要については、佐藤一男氏の『幕末会津藩士銘々伝（飯沼貞吉）』が明快なので、参考にしていただきたい。以下、貞吉（貞雄）の生涯で解釈が分かれる事項およびあまり知られていない事項を中心に年代順に記すが、「身内のえこひいき」というご批判は甘受する所存なので、ご意見等いただければ幸いである。

三、貞吉の救出過程 ——自刃から猪苗代謹慎まで——

貞吉は自刃したあと、一命を取り留めるが、その救出物語に関しては諸説がある。その主なものは、「盗賊説」と「三日三晩看病説」である。盗賊説は「飯盛山で最初に貞吉を発見したのは盗賊だった」という説で、三日三晩看病説は「近くに住む農家の嫁が貞吉を三日三晩看病した」という説である。そこで、

これらに関して順序だてて説明する。

この手がかりになるのは、明治二十七年に発行された中村謙著、河井源蔵編の『白虎隊事蹟』の中の「飯沼貞雄君事蹟」である。この本は、著者が六年がかりで白虎隊関係者を訪問調査した結果をまとめて出版した貴重な文献で、国会図書館の近代デジタルライブラリーから誰でも閲覧することができている。その冒頭には次のように書かれている。

一 本書は戊辰諸氏の忠節を伝えんが為、明治二十年八月に稿を起し、明治二十六年八月に至り記する所の事蹟を積て一小冊と為したり。而して如此星霜を費やせしは、其当時編者は書生の身にして居就常なく、加うるに維新以来旧藩の人々四方に離散し、之れが照会を為す途全く絶え、或は父母兄弟己に没し、他より其家姓を継ぐ人あり、或は遺族者と同姓異人等にて再三往復し、種々の困難を経て始めて編成したるものなり。

一 本書は旧藩主始め遺族者に贈与せんが為の計画なりしが、此の挙あると聞き伝え閲覧を希望する者多し。然るに筆頭限あるの部数を以て限りなきの需に応ずること能わず、是れ茲に印刷に附し、世に公にした

る所以なり。

一 本書の実歴は、一々殉難士の父母兄弟の報道に接し、又実地の戦記は飯沼君の口述に基き編纂したるものなり。

一 本書石版画の現場に容貌着衣の模様等は、旧藩士故印出の老母及び飯沼君の指示、遺族者の説話によりてものせるものにして、座上の想像的に模写したるものにあらず。

つまり、飯沼君事蹟と挿絵の白虎隊自刃の図は貞雄と印出ハツからのヒアリングに基づいて記述したという。寡黙な貞雄が何故この時期にインタビュに応じたのか？

貞雄は明治二十五年十一月三十日付けで、それまで一年三ヶ月勤務していた通信省広島電信建築署長代理を免じられ、東京在勤の辞令を受けた。着任は十二月三十一日。十二月初旬、広島で懇意にしていた戸枝家で送別会が開かれた。そこに、なんと白虎隊士中二番隊の同志原新太郎氏（原親三郎本人）が同席した。貞雄はこの席で飯盛山事件の真相を明かした。事件から二五年という長い間の沈黙を破つたのである。そして、原氏はこれをメモに残した。

この頃から貞雄は会津関係事項に着手して

いる。通信省東京電信建築課第一部担当主任になると、まず、明治二十六年二月に絶家飯沼友次郎（貞雄の叔父で鳥羽伏見で戦死）を再興し分家一代を継いでいる。また、この時期に電信用の会津碍子一万二〇〇〇個の政府調達に成功して、その製造に携わっていた元白虎隊士中一番隊士樋口彦四郎氏と痛飲している。

貞雄はそれまで固く口を閉ざしていたあの日のことを、広島で一度話したこと、および、碍子調達で会津に貢献できたことで心を開き、自刃後初めて取材に応じたのである。取材は東京で行われ、自刃前の顛末については、広島談を再現し、そして、秘中の秘の自刃後についても取材に応じた。中村謙氏は貞雄の取材に成功して心躍る気持ちだったに違いない。その本のトップに「飯沼君事蹟」を掲載した。これは、明治二十四年に行われて発行された二瓶由民著の『白虎隊勇士列伝』には無い新事実だったからである。

以上で中村文の背景が明確になったので、その記載内容は筆者が誤解したり、文章表現が不適切でない限り、信憑性が高いと判断できる。そこで、貞吉救出過程は上記文献を中心として、記載のない部分を他の文献で補足

して、合理的と考えられるシナリオを再現した。補足の細部やその根拠に関しては、ここでは省略する。

一 第一発見者は誰か

飯盛山から貞吉を連れ出したのは印出新蔵の妻ハツであるが、飯盛山に多数の死体があるのを最初に発見したのは飯盛山近くで農業を営む渡部佐平である。印出新蔵の役職は「武具役人」（足軽ではない）で、家禄は十三石三人扶持（内七石一人は御役料）、住まいは「会津城下屋敷之図」に記載されているように城郭外の天寧口の近くで、飯盛山までは約二km、途中に慶山村があり、渡部佐平一家が住んでいた。息子に四郎（一八歳）と八次郎（一六歳）がいて、四郎は越後方面に出陣中で、八次郎は鉄砲を持って家を飛び出したまま戻らなかったとある。

八月二十三日の朝、佐平は山にきのことりに出かけ、飯盛山で多数の侍が死んでいるのを発見し、急いで山を降り自宅に急いだ。一方、ハツは息子を滝沢方面に探しに出て、途中で顔見知りだった佐平に出会い、飯盛山に死体があることを知り、現場に向かった（『新東北第一七巻』）。死人の中から息のある

貞吉を発見したハツは貞吉を近くの炭焼き小屋まで運び、藁を掛けて見つからないように工夫し、医術に心得のある義弟のところに助け手求めて山を下ったのである。

二 盗賊説は本当か

自刃白虎隊士が身につけていた刀や金品を巡って、盗賊説が登場した（中村彰彦著『飯盛山の盗賊』、週間新潮）。貞吉が盗賊に刀と金を騙し取られたことは『事蹟』に明記されている。ただし、盗賊が現れたのは、ハツが炭焼き小屋を後にして、義弟を伴って再び小屋に引き返すまでの間である。盗賊の名前は冬木沢村の只蔵で、「城に案内できる者を連れてきてあげるから刀と金をちよいと貸してくれ」という巧みな誘いかけをした。自刃に失敗して慙愧に耐えない貞吉は「入城して再び戦える」と聞いて、まんまとこれに騙され、大小の刀と金を渡してしまった。従って、盗賊が関与したのは事実であるが、第一発見者ではない。仮に、盗賊が飯盛山の自刃の現場を発見したとすれば、隊士の刀や鉄砲、財布などの持ち出しに専念し、貞吉に構うなど余計なことをするとは思われない。

三 渡部ムメの口述との関係

『渡部家文書』は渡部ムメの口述を記した文書で昭和四十二年に発見され、その解説文が秋月一江氏によって発表されて一躍有名になり、以降、貞吉救出の経緯はこれが定説になったようである。

この『渡部家文書』の最後に、下記のような注釈がついている。

この事実は、明治三十三年三月九日に渡部ムメより飯盛正信が直に聞いたものである。ムメは本年五九歳、当戸主は渡部佐吉といつて三四歳である。今般、渡部ムメ大病に際し残念に思うのは、戊辰の年八月二十三日四時頃より飯沼をお匿いして看護し、その上喜多方方面までお送りしてから後は一度もお目にかげず、葉書一枚も寄越されないと何故かと思うのと、飯沼の家族の方々までが飯盛山で自害した処より直ぐに喜多方へ印出ハツに連れられて行ったのだとお思いになっている、と聞いた事、私の父佐平の忠義が今もって知られていない事。慶山小字袋山にて三日三晩の事は、私の父と私よりほかに慶山村の者でお救けした者はおられません。もし居ると言われる

なら、それはさらに嘘でありましょう。おられるならば、本日より慶山村渡部ムメ方までお出掛けになり、その旨申し出て下さい。

明治三十三年旧三月二十五日

白虎花祭りに付き 辰野始め諸君（花祭りに集まった人々）へ右の段御咄（はな）し申候也

この部分はムメの口述ではなく、飯盛正信氏が口述の背景を自分の文章として付記したもので、大意は「自分達が貞吉を救助したのに、世間も飯沼家もそのことを忘れ、挨拶の一つもないのは残念だから記録して皆に伝えて欲しい」ということである。現場に居合わせた渡部家にとっては、尤もなことで、一九九九年に喜多方の不動堂前に貞吉の記念碑を建てた日の直会の席で、渡部家のご子孫からこの文書を見せていただき、誠に申し訳ないことをしたと思った。

その後、この文書の口述部分を何度も読み返してみたが、誰が、いつ、何処で、何をしたのか良く分からないので困った。冒頭の部分は「飯盛山での第一発見者は盗賊で、彼が貞吉に水を飲ませ、堰端に沿って慶山八ヶ

森という岩山まで連れて行った」と読める。また、「忠ぎ、忠ぎ」のくだりは三回も繰り返してきて前後関係が分からないが、佐平は「一行を滝沢村まで案内しその後はハツに頼んで引き返した」となっている。ただし、『事蹟』に出てこない事実として、「不動堂に降伏後の九月二十五、六日まで隠れていた」こと、「印出ハツと印出の伯父（義弟のこと）の二人が佐平宅を訪れ、去る八月二十三日に

預けておいた刀や諸道具を引き取りに来たこと」が記載されていたので、貞吉の不動堂隠棲説の決定的証拠となった。

四 三日三晩説と蘇生の決め手

『事蹟』と『渡部書』のお陰で、貞吉が運よく蘇生した決め手が判明した。主な要因を三つ挙げれば、

(一) 貞吉を救出するのに印出家（ハツとハツの義弟）と渡部家（伊平とムメ）が協力したこと。そして、ハツの義弟が医術に知識があったので、貞吉を塩川の医者に出来るだけ早く診せる方法を優先させたこと。

(二) このため、貞吉を伊平宅に運んで応急手当をし、そこから塩川まで（一二km）の移動に伊平が保有していた荷車を使い、その日のうちに塩川に到着できたこと。なお、荷車説は宮崎十三八氏が採用したが、当時、渡部家で馬、牛を飼っており、直径一mぐらいの車輪がついた荷車があったことを子孫の渡部栄様に確認することができた。

(三) 塩川の近江屋に二十三日夜（二十一、二二時頃）に到着し翌朝、近くの漢方医の手当てを受け、さらに夕方、偶然同宿した長岡藩軍医による近代医術による手当てを

受けたこと。もし、貞吉が三日間に亘って医者の手当てでなして匿われていたとしたら、絶命していただろうと思う。

偶然が重なって救出された貞吉は強運の持ち主だったとつくづく感じる次第である。そして、この強運はその後も続く。一方、「三日三晩」を「一生懸命」という意味ではなく、もろに三日間と解釈した人は、貞吉のその後足取りの食い違いに混乱したと思われる。

五 救出後一か月の足取りのまとめ

以上を元に、八月二十三日から一か月間の貞吉の足取りを以下に整理しておく。

八月二十三日

- (一) 戸の口原での戦闘 午前四時頃～
- (二) 退却して飯盛山へ 午前六時頃～
- (三) 飯盛山で自刃する 午前一〇時過ぎ
- (四) 渡部佐平が飯盛山で多数の侍の死体を発見 午後二～三時頃
- (五) ハツが佐平に出会う 午後三時頃
- (六) ハツが飯盛山で貞吉の生存を発見 午後三～四時頃
- (七) 貞吉を炭焼き小屋に一時避難させる 午後四時過ぎ



喜多方市岩月町入田附尻にある貞吉が隠棲していた不動堂

(八) ハツが自宅に戻り、義弟に応援を頼む
午後五時頃

(九) 盗賊が炭焼き小屋に来て刀を持ち去る
午後四時五時

(一〇) ハツが義弟を伴い渡部家に寄る
午後五時過ぎ

(一一) ハツ、義弟、佐平の三人で炭焼き小屋の貞吉の所へ行く
午後五時半頃

(一二) 一行は佐平宅に行き応急手当をする
午後六時頃

(一三) 貞吉を荷車に乗せて塩川に向けて出発
(佐平は途中まで) 午後七時頃

(一四) 塩川近くで百姓、名主(肝煎りの栗村家)に出くわす
午後九時半頃

(一五) 名主の計らいで貞吉を籠に乗せ近江屋到着
午後一〇時頃(近江屋泊)

八月二十四日

(一) 町医者三本住庵が診察
午前一〇時(自刃二四時間後)

(二) 長岡藩軍医診察
午後九時(自刃三五時間後)

八月二十五日二十八日 宿泊 中島屋二階

近江屋から中島屋土蔵二階へ移る

八月二十九日三十日

宿泊 喜多方の庄屋(湊川酒造)

中島屋から喜多方の庄屋(現佐藤義雄氏宅)に移る
八月三十一日九月二十四日

不動堂に隠棲
宿泊 沼尻不動堂

六 開城後の行動

――猪苗代謹慎所へ出頭するまで――

貞吉は自刃後約一か月間、塩川→喜多方→不動堂と敵の手から逃れながら、傷を癒していた。そして、この間ハツは途中で一度貞吉と別れて若松に帰るが、直ぐに戻って看病に当たっている。開城後、飯沼家の若党(家僕)藤太が不動堂にいる貞吉を探し当てて、その後、猪苗代謹慎所に出頭することになる。『事蹟』では藤太のことを附記として以下のように記している。

飯沼家の僕藤太は、同家に勤むる事十三年一日の如く、曾て過失のありしことなし。戦乱の日は(即ち八月廿三日)家夫人を城内に送り途上西郷家に寄り、安否を伝う可きの命を受け、西郷家に至る。同家は已に皆自刃の後にて、命を果たす事能わざりしと、是より直ちに藤太は滝澤村、或いは戦場に至り、白虎隊の様子を聞き、

種々の艱難辛苦を経て鴨村小田付村等に至り、隊中一人氏の蘇生せしを捜り聞き、終に喜多方村の庄屋池上勇蔵方にて始めて邂逅せしなり。

西郷家とは、西郷頼母氏なり。同氏は藩主の京都守護職たりしとき時勢を説きて御退職を勧むも省せられず、此日事急なるを聞き、城中に入り、兵を率いて奮戦す。其の妻千重子(千重子は飯沼氏の叔母なり)、幼子を刺し、左の一首を残し、自刃せりと言う。

なよ竹の風にまかする身ながらも

たわまぬ節はありとこそきけ

現地調査によれば、喜多方村の庄屋池上勇蔵というのは該当するところがないが、元湊川酒造で、現在は佐藤善雄氏宅となっているところで、貞吉を一時預ったという口伝が残っている。庄屋というのは「湊川酒造宅」ではないかと思われる。なお、佐藤氏の話では、貞吉は二三日後には、一km先の不動堂に移されたとのことなので、二人が邂逅した場所是不動堂であろう。不動堂は、正式名称を紫雲山来迎院清流寺という。鬱蒼とした林

の一番奥にあり、滅多に人の出入りはない。この不動堂の管理は、現地の若菜家が代々行っており、やはり、貞吉の口伝が伝わっている。当時は、

「若し会津藩に縁故の者を泊めるときは、一族従類で誅すべし」という新政府軍の布告があり、貞吉隠匿のこととは絶対の秘密として扱われたという。

『女たちの会津戦争』という本には、郊外に逃れた会津藩重臣手代木直右衛門の家族が、何処にも泊めてもらえず放浪した苦難の様子が紹介されているが、貞吉は幸運だったといえる。

藤太は不動堂から貞吉を連れ出し塩川に戻り、代官所で謹慎していた母ふみに再会させた。『事蹟』にこの部分の記述はないが、藤太は「途上西郷家に寄り」という極めて重要な情報を残している。藤太は貞吉の出陣を見送った翌日の二十三日朝、飯沼一家を入城させた後、西郷家に寄って、一族二人の自刃現場を見たのである。この自刃現場に立ち寄った人物は「土佐藩士中島信行」とされているが、藤太も立ち寄ったことになる。『藻汐艸』によれば、飯沼家は弟関弥と乳母は入城

できたが、母ふみ、妹比呂子、祖母こうは入城できず、藤太の案内で、塩川に避難したとなっている。ということは、立ち寄ったのは藤太だけではなく、母ふみら飯沼家の家族も一緒だった可能性が高い。ふみは凄惨な血の海と化した西郷家の自刃現場を目撃したのではないか。それが故に、後述するように西郷頼母が三一年ぶりに会津に戻った時、真つ先に飯沼家に寄ったのではないのか……

貞吉の避難生活中の心情は、『事蹟』の次の記述から読み取ることができる。

氏は此の難を避け、喜多方村に至り、庄屋

池上某の宅に寄り、

日々治療を加え、心

潜に嘆いて曰く、

「吾出陣の際、母の

諫めし事あり。今

疵のあればとて、一

度飯盛山の朝露とな

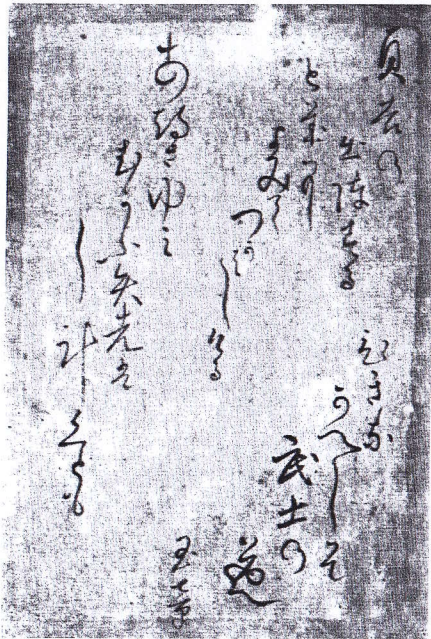
り、蘇りしこそ

却て不幸の不幸な

り。然れども、事茲

に至りては速に疵

を癒し、暫く忍び



あずさ弓の歌。「貞吉の出陣するときによみてつかはしける」とある

ざるに忍び、暫く堪えざるに堪え、尚奮戦後事の策あらんと。
「母の諫めし事」というのは、出陣に際して贈られた「あずさ弓」の歌のことである。「潔く死んできなさい」として送り出されたのに、生き返ってしまったことが、不幸中の不幸で、傷を癒して再度戦うことが唯一の残された道と考えていたのだろう。
梓弓向ふ矢さきはしげくとも
引きなかへしそ武士の道
このような状況で、母と再会した時の思いを貞雄は後に、

「なんとも申し訳ないような気がして……」と表現している。この時点で、親族西郷家の凄惨な自刃を知っていたとすれば、そのやるせない心境は言葉では表現できなかっただろう。

母との再会のこと、貞吉は塩川郊外の下邊田の星初太郎宅に移る。理由は、

「当時氏の患部は医業に乏しきと時氣の変遷によりて益々鼻爛（ただれる）し、飲食呼吸漸くにして体勢を養うに至らざりし」となっている。悪化した傷の治療のためである。「時期の変遷」は旧暦の九月二十五日は現在の十一月九日であるから、一か月前とは打って変わって寒気が厳しくなったことを指す。夜具や暖房が無い中で生活は辛かったに違いない。貞吉は星家に約二週間滞在する。塩川の歴史に詳しい佐藤一男氏によれば、星初太郎は西郷家に仕えていた武者で「西郷太郎」の異名を持ち、長州藩参謀世良修蔵の暗殺に加わったとの疑念を持たれたという。また、塩川には西郷家に出入りする庭師や左官などが多数住んでいたようである。貞吉が頼母の甥であるという血縁関係がここで有効に働いたのであろう。この下邊田

で、河原勝治が十月六日に「首に包帯を巻いた貞吉を見かけたが、後日訪ねたらもういなかった」という重要な記録（『戊辰会津戦争回想談』会津会雑誌）を残している。

貞吉は星家を出て猪苗代謹慎所に出頭するが、その時期は十月九日、きつかけは「ヤーヤー一揆」の勃発で、会津藩降伏後、それまで抑圧されていた農民が暴動を起し、名主などを襲ったため、星家も安泰ではなくなったためではないかと推察している。

七 猪苗代謹慎所で戦友と再会

貞吉は猪苗代謹慎所で白虎隊士中二番隊所属の戦友四人に再会した。その四人とは愛犬クマで知られる酒井峰治をはじめ、遠山雄牛、藤沢啓次、庄田保鉄である（佐藤一男氏）。ここで、遠山は原田半隊長翼下に所属して、二十三日夕方に城に帰還した。酒井は死線を彷徨い入城したのは二十五日である。藤沢と庄田は山内隊所属である。したがって、この四人は戸の口原の戦闘では、それぞれ、別な体験をしていたことになる。飯盛山事件については、彼らは知らなかったから、貞吉の供述は特に衝撃的だったと思われる。四人はそれぞれ、生死を賭けたあの日の体験を語り合

ったことだろう。

白虎隊の悲劇の実態をはじめて公にしたのは、明治二年四月に発行されたわが国最初の新聞『デリカラフ』である。

「此に御談あり。一のお嬢ありて其の子の行方を知らず」で始まり、「何れも白虎隊にて悉く死に就き、一人蘇生せるに因つて、外十五人の姓名も詳らかなりける由なり。かかる幼弱の身として決心の深きを見れば、成長の後は英材となるべきものありつらんに、惜しきことなりと人々云えりとぞ」と続く文章は良くできている。貞吉がこの時に戦友に話した内容が、新聞記者の知るところとなつて、掲載されたことは間違いない。

八 穂積朝春の白虎隊自刃の図

穂積朝春が描いた白虎隊自刃の図は会津武家屋敷に保存されている。宗川寅次は、『補修会津白虎隊一九士伝』の「はしがき」に、以下のように記している。

（中略）余は祖父及び母等と会津より上京し、国難以来互いに生を期せざりし、父子夫妻始めて茲に相会するを得たり、実に明治二年秋八月某日なり、余甫めて九歳、父は余を慰め示すに一九士飯盛山に於いて

自刃殉難の図にして美麗に彩色を施せる一幅を以てしたり、其の図は同藩士穂積朝春（一瀬勘助）氏が同幽処に在りて数幅を試描し、其の一を我が藩公に献じ、一を余が父に贈りしものなりと云う、蓋し是を一九士殉難図の嚆矢となす。

一方、河北新報に掲載された貞雄の取材記事『白虎隊実歴談』には次のように記されている。

（一）は筆者付記。それから初めにも一寸置いて置いたことだが、白虎隊の絵をして世に行わるものの、最も確かなものが一種ある筈だ。というのは、氏父子が猪苗代（東京となつてゐるが間違ひ）に謹慎中、家嚴（父親のこと）の隊に頗る画を善くするものがあつた。その者の望みに任せて、氏は飯盛山に於ける白虎隊自刃の時の光景を語りて聞かせる。この実話に基づいて、その者が（東京謹慎中に）唐紙の全面に描いたものが、即ちそれなのである。

貞雄は猪苗代で父一正と再会した。このとき、父は傷心した貞吉を励ましたと思われる。一正はこの時、青龍隊の中隊長で配下に一瀬勘助がいた。勘助は弟重村と共に、会津では高名な絵師に付いて学んだ絵の達人だった。

四 猪苗代を出発してから、工部省に任官されるまで

（明治元年十月、明治五年八月）

一 東京に護送されたのは何時か

さて、これから後が貞吉長州滞在説と関連して史実解明の重要な場面となる。「事蹟」

には、明治五年に任官となるまでの四年間について、以下に示す僅か四行しか記されていない。特に、明治三年十一月までの二年間については、一行にも満たない記述で片付けている。そして、この空白の二年間が長州滞に説に該当する。

後、藩主の東京に移らるるに当たり、氏も亦護送せられて謹慎の身となり、明治三年十一月、藩主学生を諸方へ遣わさるるに当たり、氏も亦選れて静岡に至り、林三郎の塾に入る。居る事一年、留学生廃せらるるに当たりて藤澤次謙に就く。同氏出仕の身となるに及んで、共に東京に至り、同氏の斡旋に依り電信修技校に入り、遂に業を卒え、職を技術に奉じ、今猶通信省の電信建築署長たり。

貞雄の弟関弥が残した自叙伝『藻汐舛』には、貞雄のことを実に面白く表現しているのが全文を引用しておく。

次兄貞雄（始貞吉）、少より穎敏、兎角兄を凌ぐの風があつたから、府君（父）は二三男は浪人者で兄の世話にならねばならぬから、何事でも兄の命に惟れ従うようにしようと仕付けられたそうであるが、なかなか云う事を聞かず兄の方が負け気味であ

つたから、いつも貞雄の方を叱られたそう
だ。そうすると、直ぐ三ノ丁のおさと（母
の実家、西郷家）へ走り行き、其の事をお
じいさん（西郷十郎右衛門近登之）、おば
あさん（西郷なほ子）に話す。此のおじ
いさん、おばあさんは大の貞雄びいきであ
ったそうだ。兄をいじめて府君に手ひどく
叱られた時などは、日が暮れかかっても帰
ろうとしない。おじいさんが抛り所なくお
詫びをしてやるから一緒に来いと、肩衣を
つけてお詫びに来られる事もあったそう
だ。

戊辰の時は十六歳で、土中白虎二番隊に
入り戸ノ口原で敗戦、飯盛山で皆と一処に
自刃したが蘇生したは此の人である。謹慎
赦免後、直ぐに静岡の林三郎という人の塾
に入りて修行せられ、それから通信省の電
信学校に入り、卒業後仕官して電信の技手
より累進して技師となり、日清戦役には大
尉の資格にて朝鮮へ出向を命ぜられ、電線
を架設して大いに功績あり、年金勲章を授
与せられた。晩年には勅任技師迄になり、
退官後は仙台市に居をトし悠々自適余生を
送られたが、昭和六年二月病んで没せられ
た。享年七十八。

一方、父親については、
一正府君は戊辰の年四十二歳で、白河戦争
の時は西郷頼母近慮総督の部下で、土中小
隊頭として奮戦せられたが、戦利あらず
総崩れとなり、城下に引揚げ、後（青龍一
番隊）寄合組中隊頭として各地に転戦中、
右眼下に負傷せられたが、かすり傷であつ
たから籠城中も何の差し支えもなく、おの
が持ち場を守つて居られたが、降伏後は猪
苗代に謹慎、江戸に護送せられては護国寺
で謹慎せられたそうであつた。

父については、「江戸に護送せられては護
国寺で謹慎」と明記しているのに対し、貞吉
については「謹慎赦免後、直ぐに静岡の林三
郎という人の塾に入りて修行せられ」となつ
ており、何処で謹慎したかについてはふれて
いない。「父子共に東京で謹慎」という説も
あるが、この間に、会津関係者の誰とも会つ
た形跡が無いので、甚だ疑問である。

会津藩謹慎者の護送状況を表に示すが、年
内に護送されたのは幹部・重役クラスで、そ
の他の藩士は翌年一月以降に護送されてい
る。ここで気になるのは「事蹟」にある、
「藩主の東京に移らるるに当たり」

の表現。これは、「藩主護送に近い時期に」
を意味しているのではないか。藩主の護送は
十月十九日であり、第二、第三陣の重役・幹
部とは同行していないから、これに近いのは
第一陣ということになる。そして、第一陣に
該当する事項について、長州藩中隊長榎崎頼
三は「毛利家文庫 藩臣履歴」に以下のように
報告している。

一、同月（明治元年十月）総督府より降兵護
送の命之有り、猪苗代に帰り諸藩の脱兵
四百六十余人を請取り、同二十四日、千
住宿に帰着、降兵隊長二十四人を呼び
出し、苦戦の勞を慰し、藩々の重役へ残
らず引渡し的一件、滞り無く相済ませ差
し届出候事。

ここで言う「諸藩の脱兵四百六十余人」と
は会津に加担した旧幕兵の内、鶴ヶ城で籠城
戦を戦い会津と一緒に降伏した兵を指し、第
三歩兵隊（隊長、旧旗本五千石、幕府歩兵頭
加藤平内）約二〇〇人、草風隊（隊長、旧旗
本五千石、天野加賀守花蔭）約二〇〇人、
凌霜隊（郡上藩、隊長 朝比奈茂吉）二六
人、等合計約四六〇人のことであり、会津兵
は含まれていない。出発は十月十二日、護送
責任者は長州藩士榎崎頼三、東京到着は十月

会津藩降伏後の藩士ら降人の謹慎地への護送状況

番 号	出発日	出発地	護送対象	引率者	到着日	到着地	引渡し先
第一陣	10月12日	猪苗代	脱走人460名	長州・大垣	10月24日	東京	各出身藩
第二陣	10月19日	護国寺	藩公・重役15名	佐賀	11月3日	東京	因州藩
第三陣	12月12日	猪苗代	幹部13人	小倉	12月26日	東京	堀田・細川
第四陣	1月3～5日	塩川	城外組1744人	越前・加州	1月15～17日	高田	高田藩
第五陣	1月7～13日	猪苗代	城内組3254人	小倉・加州	1月19～27日	東京	護国寺等
第六陣	2月29日	若松	照姫26人	紀州	3月10日	東京	紀州邸等
第七陣	6月16日	青木村	病兵900人		7月初旬	東京	芝増上寺

二十四日であ
る。

総勢五五〇
〇人もの降兵
を護送するに
は、護送体制
と共に謹慎預
かり体制を決
めなければな
らない。旧幕
府脱走兵の謹
慎先は元の所
属藩に早々と
決定されたの
で、護送の第
一陣となつた。
一方、会津
兵は約五〇
〇〇人と人数
が多いので、
受け入れ体制
が決まるまで
に時間がわか
り、その間三
か月間に亘つ

て猪苗代および塩川に待機させられ、護送は
翌年になった。

ところで、貞吉が脱走兵に誤認される可能
性はあつたのだろうか？

猪苗代謹慎所には約三〇〇〇人の会津兵が
集められ、在陣参謀がその管理に当たつた。
その管理方法は、会津藩の軍事体制を使つて
調書を作ることだった。貞吉は約一か月半に
亘つて戦線を離脱していたが、猪苗代に出頭
した時には、

「飯沼貞吉 白虎土中二番隊所属 隊長は日
向内記」

と申告したにちがいない。開城時、土中二番
隊長は寄合組から昇格した望月辰太郎に変更
されておられ、貞吉の旧二番隊は一番隊と合併
して、隊長は日向内記になっていた。合併し
た白虎隊士は半月前から猪苗代に謹慎してい
たから、捕虜調書は出来上がつていた。一方、
望月の二番隊は塩川で謹慎中で、二番隊はこ
こにはいない。役人は「これまで何処で何を
していたか？」と詰問し、「一番隊と二番隊
の軋轢」に気付き、貞吉を「あやしい奴」と
して脱走兵扱いにした可能性は否定できな
い。

二 長州連行説は本当か

榎崎頼三は東京で降人を旧藩に引渡しした後
の行動を、以下のように報告している。

一、同二十五日、東京に凱旋、行宮（天皇の
仮宮）へ罷り出、兵隊一統へ天顔拝謁、
御酒頂戴、且つ、会城へ突入の功により
羅紗軍服頂戴、仰せ付けられ候事。

一、十一月西京（京都）を發し、廿五日浪
花出港、廿九日三田尻着、十二月朔日
（二日）山口着、御屋形（長州藩邸）罷
り出、敬親（長州藩主）御拝謁仰せ付け
られ、万事相済み、同二日より帰休仰せ
付けられ候事。

貞吉が第一陣と共に東京に護送されたとし
れば、引渡し先が無いから、その後長州に連
行された可能性が十分考えられる。しかし、
頼三が残した二〇〇ページにおよぶ「陣中日
記」の何処にもこれを示唆する記録はない。
会津では山川健次郎らが猪苗代を脱走して、
長州藩士奥平謙輔の世話になったという話
は有名であるが、この事実を長州人が記録に
残したという話は聞いたことがない。これら
のことは、会津にとっては重大事件であつて
も、長州側にとっては記録に残すほどの事項

ではなかっただろう。まして、『陣中日記』は軍人としての職務報告であるから、貞吉に関する記述がないのは当然とも言える。「記述なし」が「滞在なし」の根拠にはならない。貞雄が生涯に亘って長州滞在を口外しなければ、その証拠は何処にも存在しなくてもおかしくはない。

なお、「会津藩士貞吉が長州行きに同意するはずが無い」という意見があるが、連行する側から見れば捕虜貞吉の同意や希望などは考慮の対象外であり無視して当然である。

三 高見家について

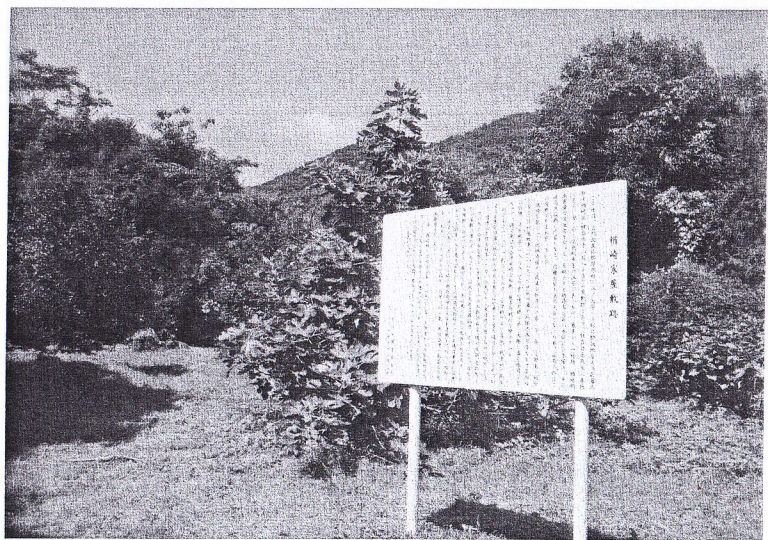
堀田節夫氏が「貞吉が長州に行つて助けられた」という説を『蒙談第二四号』に発表したのは、平成九年である。この話を聞いて筆者は「そんな馬鹿なことがあつてたまるか」と一蹴した。飯沼家は自刃失敗の汚名を着せられ、会津から白い目でみられているのに、もし、「藩敵長州の世話になつた」などとなれば、恥の上塗りになる。

その後、京都史跡ガイドボランティア協会の中村正氏の計らいで、山口県美祢市を訪問する機会を得た。貞吉長州滞在説に関してはこれを否定する証拠も肯定する証拠も見つ

からない。ところが、美祢市の小杉にある�崎屋敷跡には「貞吉は当屋敷においてしばらく養育された」という『説明版』が美祢市教育委員会の手で建てられており、高見家の方々に直接お会いして話を聞いてみると、どうしても作り話とは思えなくなつた。

貞吉長州滞在説の元になつた高見家の口伝の発端は、昭和五十六年に郷土史家浦上豊氏によつて書かれた『文部大臣 高見三郎傳 小杉の巻』で、その後、西郷頼母研究で著名な堀田節夫氏、山口の蒙談会の主宰者金本利雄氏らが追跡調査した結果を発表した。これらの文書には筆者の「誤解や創作」が多く含まれているので注意を要するが、要点は次のようになる。

- ① �崎は会津少年を長州に連れてきて、榫屋敷に住ませた。
- ② 会津少年が自刃さわぎを起こしたが、諫めてこれを止めた。



山口県美祢市小杉にある榫崎屋敷跡

- ③ 当時、榫崎屋敷には高見フサが奉公していた。
- ④ 少年をサダキと呼んでいた。
- ⑤ 苦学して文部大臣になつたフサの孫高見

三郎は会津少年の猛勉強振りを聞かされ、奮起した。

⑥ フサの孫久保冬代さんと曾孫の吉井綾子さんはこの話を何度も聞かされた。

⑦ 吉井綾子さんは観光旅行で白虎隊のお墓に詣でたが、「其処に新しいお墓が一つあつたので、少女の頃の伝承を思い出して近付いてみると、飯沼貞吉の墓だつた。」

また、高見家からの聞き取りで分かつたことは、以下のようなことである。

- ① 高見家では今でも毎年、小杉の本家に集まつて貞吉物語を繰り返している。
- ② その理由は、貞吉事件は高見家の誇りだからである。
- ③ 榫崎については、全く情報が伝わっていないし、話題にもならない。

榫崎頼三は一八四五年（弘化二年）五月十五日、長州藩士（八組士）林源八の二男として萩城下土原梨木町に生まれ、幼名は竹次郎。元治元年四月、同藩士馬廻り役の榫崎殿衛（たけし）の養子となり、後に榫崎家の家督を嗣ぐ。家禄は九三八斗六合。藩校明倫館で学び、慶応元年（一八六五）五月、干城隊

（上士から成る部隊）に入隊。慶応二年六月の「四境戦争」では小隊長となり、芸州口（広島）で幕府軍（征長軍）を撃退。翌慶応三年、長州藩の第一大隊に所属、鳥羽・伏見の戦の後、慶応四年二月に中隊長となり、東山道先鋒軍に加わり、関東各地を転戦。その後、会津に至り、鶴ヶ城攻囲戦の指揮を執り、九月二十二日に陥落させ、降伏式にも幹部の一人として参列した。なお、小杉は榫崎家の知行地（石高の支配地）で、農家一二軒と榫崎屋敷があつた。詳しくは別稿に譲る。

榫崎屋敷跡は山々に囲まれ、近くには小川があり田畑がある。坂道を登っていくと、ちよつと開けた平地に大きな石碑があり、その周りは鬱蒼とした大木で囲まれている。あたかも神社の境内のように落ち着いた場所である。ここは、貞吉が心の傷を癒して、次の人生の歩み方を考えるのに最適な場所。高見家は榫崎屋敷の直ぐ傍に位置し、この地域の農家の筆頭核である。「高見フサをはじめ、高見家の人たちがあたたかく支えてくれたから、貞吉は立ち直ることが出来た」と思った。なお、綾子さんは体調不良で伏せておられたところ、丁度この時期だけ回復され「面会が

叶つたこと」をととても喜ばれたとのことだった。その四か月後に綾子さんの訃報が届いたときには、「あの時偶然に面会できたのは貞雄の強運が自分にも乗り移っている」と運命の巡り合わせのようなものを感じた。

四 榫崎屋敷での生活

では、貞吉は榫崎屋敷でどんな生活を送つたのだろうか？ 高見家五代目の吉井克也氏に再現してもらつた榫崎屋敷の間取りは、書斎や客間を含めて部屋数は六間、外に厠、風呂、馬屋が付いている堂々たる構えとなつている。

『事蹟』はこの間の細部に一切ふれていないが、

「藩主の東京に移るに当たり、氏も亦護送せられて謹慎の身となり、明治三年十一月、藩主学生を諸方へ遣わさるるに当たり、氏も亦連れて静岡に至り、林三郎の塾に入る」の二行から読み取れることは、「謹慎の身」になつたことである。おそらく、貞吉は榫崎屋敷で謹慎し、謹慎中は勉強し、その教材は頼三が提供したのだろう。

一方、榫崎頼三のその後は、明治二年 山口文学寮（山口明倫館）文学

寮と兵学寮とからなる)

明治二年十二月二十八日 横浜語学所

明治三年五月十二日 兵学寮

明治三年十月二十七日 横浜を出航してパリに留学

明治八年二月十七日 パリで客死。墓碑はパリ市内のモンパルナスにある。享年三十一歳。となっており、頼三は有能で武勲多く、目を海外に向けて更に勉学に励み、多忙であったに違いない。これに、長州では明治三年には知行地の廃止など制度改革を早めに進めていたことを勘案すると、頼三と貞吉の接触期間は僅かだったと考えられる。また、高見家には植崎の情報は全く残っていないことから、貞吉は日常的には高見家に世話になったものと思われる。しかし、植崎頼三は、大村益次郎、木戸孝允、山縣有朋、桂太郎ら明治の元勲との交流が深く、将来を嘱望された人物であった。頼三との出会いは貞吉のその後の人生に大きなインパクトを与えたことは間違いない。

五 工部省に任官されるまで

さて、次は工部省に任官されるまでの足取りについて記す。

時の学問レベルは日本一で、諸藩から留学生が殺到したという。ここに集まった教授陣および学生がやがて全国に散らばって、明治維新のテクノクラートとなる。

貞吉が明治三年十一月に入学したのはこの林三郎塾(静岡学問所)だった。

「藩主学生を諸方へ遣わさるるに当たり、氏も亦選れて」という表現は、この時期に「会津藩が子弟教育のために、組織的に動いた」ことを示唆している。後に海軍大将となる出羽重遠(戊辰時満一三歳、貞吉の二歳下)も林塾で学んでいる。会津藩の代表責任者として切腹した萱野権兵衛の長男、郡長正(戊辰時満一三歳)はこの時期に五人の仲間と共に豊津藩(小倉藩)の藩校育徳館に留学したが、明治四年五月に不幸にも現地で切腹した。山川健次郎がアメリカに出発したのは明治四年一月である。敗戦で全てを失った会津藩は、窮乏生活の中でも若手の教育に腐心したのである。なお、飯沼関弥が残した手紙集(「山高水長」)には出羽からの手紙が多数ある。

明治四年九月には西郷頼母が伊豆に行く途中に林塾に立ち寄っている(『西郷頼母』堀田節夫)から、貞吉はここで叔父と再会した

『事蹟』は

「明治三年十一月、藩主学生を諸方へ遣わさるるに当たり、氏も亦選れて静岡に至り、林三郎の塾に入る。居る事一年、留学生廃せらるるに当たりて藤沢次謙に就く。同氏出仕の身となるに及んで、共に東京に至り、同氏の斡旋に依り電信修技校に入り」と手短だが、重要な手がかりを残している。

会津藩の斗南(下北半島)移封と藩再興が決定したのは明治二年十一月三日で、翌明治三年一月に藩士の謹慎が解除になり、四月には東京芝増上寺に藩学を開設し、在京藩士の子弟教育が始まり、山川健次郎らがここで学んでいる。六月に藩士と家族の斗南移住が開始されると、八月には藩学は閉鎖され、山川らは沼間塾に移っている。この時期は藩士子弟が落ちていて学ぶ体制が整わず、それぞれが、生活資金もないまま伝手を頼りに苦心賛嘆した時期である(『ある明治人の記録』柴五郎)。

一方、徳川家七〇〇万石は江戸城開城後すぐに、七〇万石に減封され駿府(静岡)に移封が決定した。旗本三万人とその家族が静岡に移住を開始するに当たり、徳川家臣は軍事總裁勝海舟を中心にその対応を開始し、

七 藤沢次謙とは何者か?

とされる。ところが、明治四年四月に工部省が新設されると、静岡学問所は工部省に移管されることになり、同十一月には廃止となったので、貞吉も身の振り方を考えなければならなかった。そして、運よく藤沢次謙の書生になり、電信への足がかりを掴んだのである。

藤沢次謙は天保六年(一八三五年)、將軍徳川家の奥医者第七代桂川甫賢の三男として生まれ、名は甫悦(のち主悦)。幕末期の桂川家は役目柄洋書の入手が許されていたため、勝海舟、福沢諭吉、神田孝平(明治の税制改革に貢献)などが出入りする洋学者サロンの様相を呈していた。一八五六年四月二十五日、築地に講武所ができ、主悦は十月一日、幕府講武所砲術教授に抜擢された。この時期大村益次郎も講武所教授翻訳係りをしていたので二人は顔見知りである。

一八六二年十一月七日 主悦は幕臣藤沢家一五〇〇石の養子となり跡目を相続し藤沢次謙と改名、浅野伊賀守次郎八の妹お鏡(幼名三亀)と結婚した。その後、一八六四年三月將軍家茂とともに入京し、当時の幕府軍

静岡に学問所(戊辰十月)を沼津に兵学校(明治二年一月)を開設し、人材の教育に当たっていた。

そして、函館戦争に参戦して降伏した旧幕臣が明治三年四月に赦免になると、八〇〇人以上が静岡藩に帰参し、そのうちの有能な人材は両校の教授に採用された。静岡学問所と沼津兵学校とは姉妹校で、沼津が軍士官の育成を目的としたのに対し静岡は一般教養を教え、後に工部省に移管されて東大工学部の前身になる。

六 静岡の林三郎塾とは

林三郎は元会津藩士で、天保四年(一八三三年)一月十四日生まれ。父源太、母由利、妻は松平謙次郎娘志子。林は東京麹町に出て、昌平坂学問所に入り、会津藩江戸詰めとして活躍し、のち徳川家幕臣となった。四歳上の兄・源輔は八月二十三日に戸の口原に近い大野ヶ原で戦死した。林は戊辰五月から勝海舟補佐役として静岡藩に出仕し、開業方物産掛となり、その後静岡追手町に三五六坪を拝領し、漢学を教え始めたが、これが静岡学問所の前身となった。漢学、国学などの他、数学、英語、フランス語は特に重要視され、当

事總裁だった松平容保に会い、藤沢志摩守次謙に改名申し出て許可された(その前は容保と同じ肥後守を称していたので具合が悪かった)。大政奉還後の一八六八年一月二十三日幕府の職制改革により、陸軍總裁勝海舟(四六歳)、副總裁藤沢志摩守次謙(三三歳)、海軍副總裁榎本武揚となつたが、徳川家が静岡藩に移封されるにあたり、藤沢は沼津脇本陣にて沼津城受取役(七月)、静岡藩少参事軍事掛(九月)を経て、明治二年一月に沼津兵学校の学校掛となり、会計・教授選考などを担当していた(『勝海舟の参謀 藤沢志摩守』)。

貞雄(貞吉から貞雄に改名したのは藤沢以降と考える)が藤沢の書生になった時は、妻お鏡との間に長男鉉之進八歳を筆頭に四男一女と伯母お信の八人暮らしだった。なお、次謙の兄甫周の妻には御浜奉行木村喜彦の娘で、その娘みね(一八五五年生まれ)は『なごりの夢』の著者として有名である。また、画才があり、『フランス出征兵士図』という水彩画(一八五九年八月主悦二五歳の作)は、現在も東京芸術大学に所蔵されている。

明治四年九月 兵部省が沼津兵学校を管轄下におくことを内定すると、明治五年三月六日藤沢は勝と共に上京し、同氏の推薦で海軍

中議生（三月二十七日）を経て十月に四等議官となり、月給は一〇〇円で東京神田小川町に住居を構えた。「同氏出仕の身となるに及んで、共に東京に至り」はこのことを指している。

貞雄が書生になった藤沢はこのような人物だった。貞雄は東京に来て直ぐに木挽町（現在の東京東銀座）の電信修技校（電信寮の予備校）に入るが、小川町から木挽町までは徒歩で三〇分という便利なところだった。貞雄は明治五年春電信修技校に入り、明治五年八月二十六日、工部省に任官された。

藤沢家に届いた貞雄の採用通知状は、次のようになっている。

「御用の義、これあり候間、明二十六日第十字（午前十時）礼服着用、工部省へ出頭致すべきなり、壬申八月二十五日、小川町裏神保町三丁目、静岡県野崎藤沢次謙方 飯沼貞雄殿 青森県」

初任の肩書きは「電信寮技術等外見習下給」と長々しく、「お前は下のだ」といわれたのも同じと解釈している人もいる（『札幌にいた白虎隊士―飯沼貞吉―』金山徳次）。

いずれにしても、こうして、貞雄の強運は続いた。

五 飯沼貞雄と電信の開拓

工部省（後通信省）に任官されてからの足取りは、貞雄自筆の官歴書に詳細に記されている。任官後の貞雄については「通信省に入り、電信技師となり、仙台通信管理局工務部長となる」とするのが通例で、何をしたのかは説明がない。ここでは、貞雄と電信のかかわりで重要と思われる事項を解説する。

一 電信へのかかわり

わが国の電信（今の電報）創業は、明治二年（一八六九）の東京築地―横浜裁判所間三十二kmの開設に始まる。アメリカ人モリスが電信機を発明したのは一八三七年で、七年後の一八四四年にワシントン―ボルチモア間で実用電信回線が開通した。イギリスでは蒸気による鉄道の発達と並行して電信線は全国に広がり、一八五五年のクリミア戦争をはじめ、インドでのセポイの乱で電信を軍事用に使い、大成功を収めた。アメリカでは一八六一―一八

ため、驚異的な早さで電信敷設が進んだ。明治三年に大阪―神戸間が開通。明治四年六月に長崎―上海間の海底ケーブルがデンマークの大北電信会社の手によって開通し、国際電

報の開始を確認すると、八月には東京―長崎間一三四〇kmの開通に着手した。イギリスから電信技師ホストルを月給二五〇円で雇い、当時横浜の英語塾（修文館）の学生だった吉田

正秀らを抜擢して電信寮に転属させ、実務の推進に当たらせた。

貞雄が電信修技教場に入ったのは、この時である。そして、電信技術見習生として最初に赴任したのは、明治五年十一月下関（当時赤間関）だった。関門海峡を渡すために我が国初の海底ケーブル敷設が成功した直後だった。下関から美祢小杉までは徒歩で往復できる距離であったのは不思議な縁だろうか。貞雄は下関を皮きりに、小倉、山口、神戸、岡山、鳥取、大坂、奈良、和歌山、熊本、福岡、大分、新潟、島根、山形、広島、東京の各局を回って、日清戦争に従軍し、釜山、

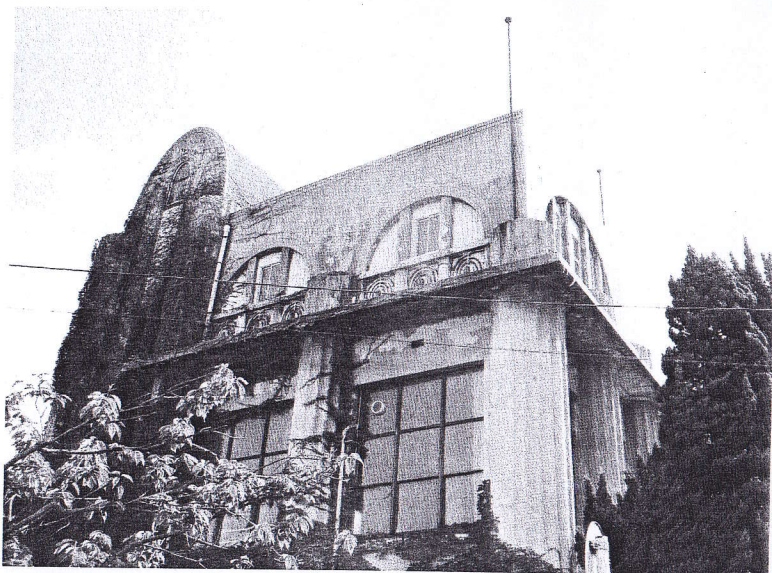
六五年の南北戦争で電信が大活躍した。日本は諸外国に二〇年以上遅れてスタートしたが、薩摩藩出身の寺島宗則（後外務大臣）の熱意と慧眼のお陰で、明治政府は金と時間がかかる軍備や鉄道よりも電信を優先させた



明治初期の電信局開設状況。数字は開局時期（明治〇年〇月）を示す

ソウル、平城を回り、帰国後、仙台、札幌に赴任し、根室に出張し全国縦横断を果たし、最後に仙台に戻って勤務した。

この間の電信の果たした役割をかいまんで述べる。明治七年―十年に佐賀、萩、熊本、鹿児島などで発生した土族の乱では、電信を使った警察情報の早期入手により乱の平定に成功した。明治二十七―二十八年の日清戦争では戦地に電信架設する事によって正確な軍事情報を把握して勝利した。更に、明治三十七―三十八年の日露戦争では海底ケーブルによる電信と無線搭載艦と短距離電話を組み合わせた統合情報網の構築により、ロシアを情報力で圧倒し、日本海海戦を制した。アジアで電信を自力で構築したのは、唯一日本だけで、これが日清・日露戦争の勝利とその後の通信大国への発展の基盤となった。一方、中国および韓国は電信を外国任せにしたため、情報戦争で諸外国のなすがままにされた。この間、貞雄は日清戦争では現地で高等官に昇格し、勲七等に叙せられ、青色桐葉章及び年金六十拾円を賜り、日露戦争では雙光旭日章と金四百円を授かっているのだ、それなりに評価に値する任務を果たしたのである。



旧下関郵便局

二 会津碍子の調達

電信用の会津碍子の調達については、あまり知られていないようなのでここに触れておく。碍子というのは、電線を電柱に固定するための部品で、絶縁性と堅牢性が要求される。明治初期における電信用品は技術を含めてイギリスからの輸入だったが、輸入碍子は高価なため、国産品が望まれていた。佐賀の有田焼はいち早くイギリスに人を送り技術を習得して、香蘭社を設立するなどして、電信用碍子の独占供給に成功した。

『会津本郷焼の歩み』に記載されている「会津碍子」の概要は以下のようなものである。

明治二十三年貴族院議員山川浩が本郷磁器の適当なるを認め、これを製造せしめ、碍子百個を通信省に寄附してその真価を知らしめたりしたが、翌年同省より碍子二万個の製造を依頼された。その後、明治二十六年十二月七日付けで、通信省調度課長中橋徳五郎と会津硝子取引商得能通要と小型硝子一万二〇〇〇個買受けの契約を結んだ。その頃、飯沼貞吉さんと、旧会津藩士で白虎隊の樋口彦四郎さんと私（山田恒三郎）の三人で痛飲した

ことがある。その時、飯沼さんは通信省の役人だった。樋口氏は白虎士中一番隊に属し、籠城戦にも加わった人で、維新後移り住んだ長野で畜産会社を経営しながら、電圧碍子の製造工場を会津に設立し、碍子の技術革新に努力した。明治二十七年十月陸軍省から普通硝子二万二千個の発注があり、山田半次郎の手を経て滞りなく上納した。その後また、軍用硝子一万個の発注があり、これも上納した。当時の通信省の幹部は佐賀出身者が多く、佐賀の有田焼に対抗して後発の会津本郷焼きを押し込むのは大変だったと思われる。貞雄はこの時東京郵便電信局電信建築課技手二級で月給五〇円、技術系のトップだった。山川浩は、まず、貞雄にその可能性を打診した。碍子は電信の最重要部品で、激しい気温の変動や風雪で碍子が破損するようなことがあれば、電信障害を起こし大変なことになる。山川の顔で押し込むことなどは不可能。兎に角、性能で競合に勝てない限り、政府調達はありえない世界である。

現場経験豊富な貞雄は有田碍子の欠点とこれを上回る性能目標を樋口に伝えた。そして、樋口は必死になって目標をクリアし、最初の一〇〇〇個の試作品は合格した。しかし、電信

用品調達には通信省大臣官房調度課の管轄で、中橋は財務課長兼調度課長で石川県出身、高等官六級年俸一四〇〇円だった。新規部品の製造に関しては、調度課所属の電信用品製造所の立会いも必要だった。この時の製造所長は元鹿兒島藩士森長保で高等官七級年俸二〇〇円だった。

貞雄は技術専門家の立場から風雪に耐える堅牢性で会津碍子の有効性を説き、浩は陸軍の立場から売り込んだことだろう。これは貞雄と浩の連携プレイだった。そして、成約した後の一席はさぞ楽しかったと思われる、痛飲した様子が目に浮かんでくる。さらに、貞雄は翌年の朝鮮出征で釜山―京城間の電信架設を成功させるが、気温差の大きい朝鮮の地で会津碍子が使われたのではないかと推察している。

三 日清戦争への出征

明治二十七年五月、東学党の率いる農民軍の内乱は朝鮮史上最大規模に拡大し（甲午農民戦争）、朝鮮には農民軍、政府軍、日本軍、清軍の四つの軍が集結し一触即発の状態となる。日本では明治二十七年六月五日に参謀本

部内に大本営が設置され、参謀総長有栖川宮熾仁親王が総責任者となり、天皇による親征体制が確立した。貞雄に出征命令が出たのは明治二十七年六月二十五日。戦地における電信架設は軍事情報取得するための生命線であるから、通信省は技術部隊をいち早く派遣した。貞雄は大本営付きとして籍を軍籍に移され、釜山から京城までの軍用電線の架設が任務となった。

通信省からは技師、書記、電信作業員など、合計七八名を出し、これに広島からは兵士と陸軍工兵士官三名を加えて一体とし、貞雄は技術部統督として士官相当の待遇を受けた。貞雄は会津戦争で果たせなかった臣節をこの出征で挽回できると考え、死を覚悟して皇国の使命遂行に邁進した。

この出征に当たって、貞雄が後事を弟関弥に託した貴重な手紙が残っている。現代文に翻訳して紹介する。この時、関弥は両親の面倒を見ながら、若松小学校に勤務していたが、貞雄はこの手紙を万一の場合の遺書としたのである。

向暑のみぎり、皆様おそろいでますます
ご清邁のこととお慶び申し上げます。

さて、このたびの朝鮮事件についてはすでに新聞でご承知のとおり、日々切迫の様相をしていますが、それで私もこのたび軍籍に編入されたうえ、たぶん四、五日のうちには出発することになるだろうと思われる。昨日日本省へ呼ばれ、内命がありました。それは釜山から京城までの間、軍用のための電線の架設のための任務です。ただし今度通信省から出張してきた者は全員籍を軍人に移し、その上で出発するはずで、今度私と同行の者は他に五名のはずで、ほかに電信作業員五十名を引率する予定で、その他にも兵士をじゅうぶん連れて行くことに決まっています。

それと言うまでもないことですが、ひとたび戦地へ出るからには、生きて帰れるかどうかかわからないのももちろんですが、なにごんにも未開の土地のことですので、この身がどのようなことになるか予想もつきません。もし万々一のことがありましたら、私の妻の事をよろしくお助けください。もしそのようなときには、ご存じのように、保険会社に五百円あり、埋葬料および遺族扶助料などで二百円ほど国からくだ

さるはずで、他に一時金として月俸三か月分百五十円くだされるはずで。その他に少しはたくわえもあり、満十五年以上勤務なので遺子が成長するまで扶助金もくだされることになりそうです。それで一雄（長男）と浦路（長女）の教育などはじゅうぶん立ちゆくのではないかと思いますので、すべてよろしくお願いしておきます。もうこれだけで（遺言など）書状は差し上げられませんが、ご理解ください。もっとも以上の件がおこらずに済むようになりますら、別に差し上げようと思っております。お名残おしいところですがいづれまた。草々。不

関弥様

廿六日 貞雄

追伸、両親さまへくれぐれもよろしく申し上げてください。「このことは軍事上の極秘のことですので、他人に漏らすようなことがないよう、お含みおきください」と。出発の際にはハガキで、手短にお知らせしようと思います。

四 朝鮮での電信架設

貞雄は、帰国後取り纏めた『従軍中の略歴』に次のように記している。なお、貞雄は戦地で日記を書いていたが、「仁川から帰る船が転覆したため、資料を全て失った」としている。

一 同年七月廿二日、第一電線架設校隊より分離し、釜山―大邱間電線架設担当を命ぜらる。

一 同年七月廿四日、技手四名、電信工夫拾名、軍夫三百名を従い、釜山郵便電信局を起点とし、以北に向い、該工事に着手す。

抑、も此の工を起すに勞りては、当時炎熱燬くが如く、寒暖計百三十度（摂氏五四度）を示すに至れり。又、概して道路險惡、車輛を通ずる能わざる為、電信材料及び数百人に対する糧食輜重（軍用の荷車）の運搬は数千の韓人又は牛馬を雇せざるを得ず、然るに韓人は其の勞を堪ゆる能わざる為、中途より逃亡するもの最も多く、又、駄馬の斃死するもの日々十を以て数うるに至る。偶々息わんとするも、太陽の熱を受け流汗淋漓、殆ど眩暈せんとす。渴し

この間の経緯について、当時釜山の電信局オペレーターだった八木鐘次郎氏（二五歳）が話した内容が昭和十五年に読売新聞に報道され、当時の様子がリアルに伝わってくるので、以下に紹介する。

明治廿七年七月廿五日、日清戦役は朝鮮西海岸の豊島沖の海戦に火蓋が切られた。本国に送るその最初の勝報を打電する私の胸は感激で張りさけそうだった。まもなく局長（松村昇一）以下五人の電信係も集まって来た。「バンザイ、バンザイ」歓呼の声は更け行く釜山湾にこだました。私の感激はひとしおだった。馬鹿馬鹿しい程涙があふれて来る。ぼうっと霞んで見える街の灯がその時一時にパッと消えた、船の灯も消えている。総領事館電信局等を含んで五千人からの日本人が住んで居る居留地はすっかり漆黒の闇に包まれてしまった。「灯を消せ」階下から声がした。電信局のランプも吹き消された。敵艦が攻撃してくるかもしれないというのだった。当時清国には靖遠、沈遠、定遠等の世界第一級の軍艦が揃っていた。内地との唯一の連絡地だった釜山をたたかれたらすでに仁川や京城に入っている日本軍との通信は絶た

て飲を取らんとするも清水なく、僅かに田畔を流るる濁水を掬するのみ。鍋で食を取らんとするも、握飯二個、梅干二粒に過ぎず。夜中眠に就かんとするも舍営なく、僅かに地上草多き所を撰み、四肢を横たえなれば、毒虫以蝟集し皮肉を刺し、夢未だ熟せずして忽ち東天の皓々たるに驚き、再び

れてしまう。釜山から京城までの陸上電信線は一ヶ月も前から杜絶えていたのだ。「釜山を護れ」の声は期せずして忽ち完全な燈火管制を敷いたのだった。

私が六月十三日この釜山電信局に来たのもこうした開城の場合に備えての命令だった。京城釜山間の連絡には汽船をもつてあてることになって、信濃川、筑後川、田子浦、木曾川の四隻が配置され仁川と釜山の間を報知艦「八重山」護衛のもとに二隻ずつ分けて毎日入れ替わりに、仁川から釜山へ釜山から仁川へ電報を運んで往復する方法をとったのである。「八重山」は当時廿ノットからのスピードを持つといわれた快速艦だったが備砲その他は到底清国の軍艦の敵ではなかった。しかも仁川までの間の西海岸にはすでに支那の軍隊が上陸して海陸からの敵の脅威の中を決死の覚悟で通信船の護衛に当たっていた。釜山電信局は実にこの重要な通信の中継所だったのだ。勝報を耳にして灯を消した釜山。闇の底に沈んだ龍頭山、龍尾山の黒い影をいつまでも眺めていた私の肩を松村局長がたたいた。「飯沼君は大丈夫だろうかね」私もそれを考えていたんだ。



家族6人が写っている貴重な写真。明治39年7月札幌で撮影。前列左から、貞雄（満52歳）、一精（9歳）、れん（42歳）、浦路（20歳）、後列左から、一雄（23歳）、松田一雄（浦路の夫）

勇気を鼓舞し、峻阪溪谷を跋渉す。加うるに此の工事中、密陽附近に於いて暴徒凡そ百余名、我一行に向いて瓦礫を投げ、妨害を加い、及び清道郡附近に於いても暴徒凡そ六拾名集合し、突然襲い来り、軍夫武名を傷つける等の挙あり、作業上最も困難を極む。

二日前（七月二十三日）の朝京城釜山間に日本人の手で電信線を架設するために乗り込んで来た男、飯沼貞雄の身の上だった。五名の技手と十名の工夫、人夫三百名を引きつれて到着するとすぐ京城指して発って行った。敵地の真つ只中に飛び込んで行くも同じことだった。技手や工夫達がみんな洋服の上に日本刀を背負っているのに飯沼だけは普通の背広姿で広島を出る時さんざん外の人からすすめられて持つて来た手槍を一本供の人夫にかつがせているきりだった。「私は白虎隊で死んでいるはずの人間です」飯沼はピストルを持つて行くようにすすめる私の言葉に答えて笑った。飯沼は白虎隊生残りだった。「命はすててますよ」電信局の玄関を離れる時そう言つて正面に掛けてある「大日本帝国郵便電信局」の横文字で書かれた金文字をじつとみつめていた。「元氣で行つて来ます。きつとやりとげますよ、船を使わんでも東京と通信が出来るようにして見せますよ」ヘルメットをぬいだ飯沼は、電信局の門のわきに立っている日の丸を仰いで明るくいった。そうして飯沼貞雄の一隊は二日前決死の電信建設行に旅立ったのだ。

私は居留地を囲む高い土手の上にのぼって、勇ましい一隊の姿をいつまでも見送った。手槍の端に荷物をつけて天秤棒のようにかついで先頭を行く飯沼の姿がいま闇の釜山を見つめる私の瞳に魅つて来たのだった。「きつと成功しますよ彼のことだから」

松村局長に私はそう答えた。明治廿七年八月中旬はやくも飯沼の陸線建設は成功し、日本軍の捷報は次から次へとこの電線を伝わって内地に歓呼のどよめきを起こした。

貞雄は朝鮮の電信架設を成功させて、約一年後の明治二十八年八月二日仁川を発し下関に着くと、直ぐに東京郵便電信局詰を命じられている。

六、日清戦争帰還後 (明治二十八年以降) (貞雄四二歳)

貞雄は日清戦争帰還後の明治三十年から八年間に亘り仙台勤務となり、明治三十八年から七年間は札幌に勤務し、明治四十三年以降は仙台に住んだ。仙台通信局の管理区は宮城、

福島、山形であり、明治三十年以降、貞雄は会津との関係を深めていく。ここでは、その主な事項についてふれることにする。

一 続く葬儀

明治三十年八月貞雄の母ふみが没した。ふみは斗南で苦難の生活を余儀なくされただけでなく、会津帰還後も非常に苦勞し健康を害し、貧血で時折折氣を失ったりした。晩年には右眼を失明した。貞雄はこのとき家族を連れて会津若松に帰った。ふみの臨終に立ち会ったのは海老名リンである。祖父・飯沼久米之進の妹なおは最初小森一寛齋(三百石)に嫁し一子駿馬を生んだが、その後離縁して海老名の先代季久に再婚し子供はなかった。なおはリンの義母に当たり、共に熱心なキリスト教信者だった。明治八年に関弥が上京した時は海老名夫妻に同行してもらっているから、ふみはリンと親しくしていたのだろう。

海老名リンは、嘉永二年(一八四九)、日向新助・まつ夫婦の娘として若松に生まれ、慶応元年一七歳で季久の長男季昌と結婚した。季昌は慶応三年に横山主税と共にパリ万国博覧会の随行員として欧州視察後、慶応四年に会津藩家老となり、越後口方面で戦った。

戦後、斗南三戸に移住。艱難辛苦の生活に耐え、青森県三戸支所、福島県庶務課長を経て、上京して警視庁課長となった。明治二十一年、リンは東京靈南坂教会でキリスト教の洗礼を受け、明治二十六年、季昌とともに会津に帰って甲賀町に私立若松幼稚園を開園、女子の教育の必要性を強く感じて、翌年私立会津女学校を創立した。季昌は明治三十年に若松町長に就任していた。

明治三十一年二月、従兄弟の山川浩が五四歳で亡くなった。浩は叔母に当たるふみとは親しかったようである。明治十九年三月より東京師範学校長(のち東京高等師範学校長)を兼任していた浩は、会津に中学校を創立するために若松入りした時、飯沼家を訪ねている。そして、その時、交換した歌が残されている。

旅衣 立わかれても武蔵あふみ
かけてそ頼む 又のあふせを
と玉章(ふみの雅号)が詠むと、
武蔵鎧 かけはなれても君に又
あひづの山は 近くこそあれ

と、屠竜子(浩の雅号)が返した。

鎧は乗馬する時の足置き台のことで武蔵鎧は、勇猛な武人を表現する歌言葉である。武蔵鎧は浩にピッタリの表現だった。叔母のふみにこう歌われ、浩もこれを自認して、返し歌の会津に「逢う」をかけたのである。浩の母えん(雅号唐衣、ふみの姉)も歌詠みである。飯沼家では貞雄が最も強くその影響を受けた。

貞雄の兄の源八が没したのは、この年の十一月だった。夏に赤痢に罹り体調を崩していた源八は、健康を回復することなく四八歳の若さで世を去った。なお、源八の妻は郡長正の妹である。貞雄は源八の葬儀にも出席し、残された子供たちの養育の支援に乗り出している。

二 飯沼関弥の松平家家令就任

貞雄の弟関弥は戊辰当時六歳で、飯沼家の斗南移住に同行した。斗南藩が出来た時に父一正は松平家の家令(執事)になった。関弥が山川健次郎から「松平家の家令を引き受けて欲しい」との手紙を受け取ったのは明治三十二年一月頃である。松平家の家政顧問は山

川浩が務めていたが、浩没後は健次郎がこの役目を引き継いでいた。以前にも飯沼家に家令就任の打診はあったが、父子二代続くのを避けたかった一正の反対で断っていた。健次郎は事前に貞雄に相談し、今度は一正も同意し、関弥はこれを引き受けた。

この時期、松平家は財政難で大変だった。容保公は側室田代佐久様との間に長男容大様、二男健雄様、五男英夫様、七男保男様の四人、側室川村名賀様との間に二女と六男恒雄様の三人のお子様があり大家族である。額面二万円の公債年金の利子は年間高々千円で、とてもやっていけない。その上、奥向きは殿様時代の名残で出費が多いから、たまたまものじゃない。関弥に与えられた課題は、この財政難の打開だった。

関弥はその後、明治四十三年六月の松平容大公卒去につき、葬儀および松平家の相続に係わったが、その場面が面白いので『漢沙艸』を引用して紹介しておく。

容大公のご遺言書は金庫に納められており、ご枕頭にて御書在中の文箱を開けると、二重に封筒が入っていて、上書きに「遺言書」とあり、実印で封印されていた。弁護士の中村六郎(会津人)氏と松平英夫様に

裁判所まで同行を頼み、開封・返却された遺言書を抱き、御殿に帰り着いた時には、山川、出羽ら顧問の方々も既に集まり、今や遅しと固唾を呑んで待つておられた。松平容保の五男英夫は明治三十九年四月、長州の山田顕義の長女と結婚、山田伯爵家を相続していたので中立の立場だった。英夫様はまず容大公のご遺骸を拝せられ、ご一同に会釈をされて、遺言書を手には、御兄上様ご遺言書を奉読します」とおっしゃった。一同はシーンと静まり返り、頭をお下げになってこれをお聞きになった。

ご遺言の内容は、以下のとおりである。
「遺言の事、予万一戦病死したる時は保男殿(七男)家督を相続せらるべし。若し以前に保男殿死去せられたる時は英夫殿(五男)相続せらるべし。若し又英夫殿死去せられたる時は恒雄殿(六男)相続せらるべし。以上」

英夫様が保男様に對し、
「御兄上様のご遺言ゆえ、この松平家を相続するに異存はあるまいな」とおっしゃると、保男様は
「謹んでお請けいたします」とお答えになった。この場の光景は、紫野

大徳寺（京都市北区紫野の大徳寺）の焼香の場もかくやと思われるほど、劇的であった。

ご葬儀を滞りなく終え、十日ごとのご祭事、ご相続のお手続きも首尾よく完了し、その数ヶ月後の顧問会に於いて、保男様が三大ご希望を発表された。

第一 末弟として家督を相続したので、兄上方へ相当の財産を御分譲申上げたい。

第二 御父上忠誠公の御尊骸を歴代の塋域会津院内山へ御改装申上げた

第三 此の家屋は手狭な上、大分腐朽し、年々修理に巨費を要するので、改装したい。

この時の顧問は、山川健次郎、出羽重遠、加藤寛六郎、藤澤正啓の四氏で、いずれもご賛同され、家令を督してなるべく早くご希望に添えるよう尽力することをお答え申し上げた。

それより予は鋭意御家政を整理し、毀誉褒貶（世間の評判）を顧みず、非常の節約を行い、数年ならずして健雄様、恒雄様へ

金壹万円ずつ御贈呈遊ばされる事が出来た。続いて奮励努力一層の儉約を断行し、

大正六年六月忠誠・存誠（容保・容大公御諡号）二公を始め奉り、四谷正受院御鎮りの方々様全部を院内山へ御改装申上げた。此の費用は中々容易の事ではなかった。其の後御儉約の方針は少しも弛めず、専念

冗費を省き、増収を計りつつありしが、大正九年の春に至り、未だ機熟せりとは思わざりしに、藤沢顧問自ら委員長格で御殿改築の工を起し、翌十年三月頃竣工御移転遊ばされた。これで、最初御発表の三大御希望が達成せられた訳である。

大正十年（一九二一）十月、関弥は引退した。勤務実には二三年、光栄の事もあり、愉快の事もあり、又或は頗る困難の事に遭遇した事もあった。其の主なる事柄は、容大公の日露戦役御出陣、英夫様、保男様の御慶事、恭定（容頌公諡号、五代）・忠恭（容敬公諡号、八代）両霊神の御贈位、蛤御門戦死者の靖国神社合祀、峰姫様、貞順院、おさく殿、おきよ殿、容恭様の御不幸、〇〇様の御負債整理、勸業銀行の負債償却等、頗る多事であった様に思う。併し只長い間御奉公したと云う丈で、一も見るべき功績なく、願て忸怩

たらざるを得ない。慙愧々々

関弥はその後、山川健次郎が中心になって編纂した『会津戊辰戦史』の発行人となり、山川浩、健次郎、二葉、操等の山川家の人々、関場忠武、南摩綱紀、出羽重遠ら主な会津藩関係者から受け取った手紙を多数残している。

三 父一正、西郷頼母、長男一雄の死

関弥が上京した数日後、西郷頼母が三十一歳に会津若松に帰還し、真つ先に飯沼家を訪ねて来た。西郷は、明治四年秋に静岡の林三郎塾で貞雄と再会後、伊豆の謹慎学舎で塾長をしていたが、明治十三年二月二日、山川浩の尽力で松平容保が日光東照宮の宮司になったのを機に彌宜に就任し、八年間に亘ってかつての主君容保を補佐した。その後、明治二十二年からは福島県伊達市にある霊山神社の宮司となり、そこで十年間神職を務めた後、故郷会津に帰って来たのだった。

西郷は飯沼家を訪ねた日のことを、「夢のようだった」と『帰る雁ガ砦』という日記に書いている。義兄弟の関係にある二人は、懐かしい昔話に興じたのだろう。翌日、西郷は

柴町の十軒長屋に居を定め、『栖雲記』の執筆にとりかかった。和綴じ一七ページの小冊子であるが、その大部分は八月二十三日の一家自刃の回想である。頼母は自刃現場を知らないはずであるから、飯沼一正から話を聞いたのであろう。なお、栖雲とは雲に棲むという意味である。

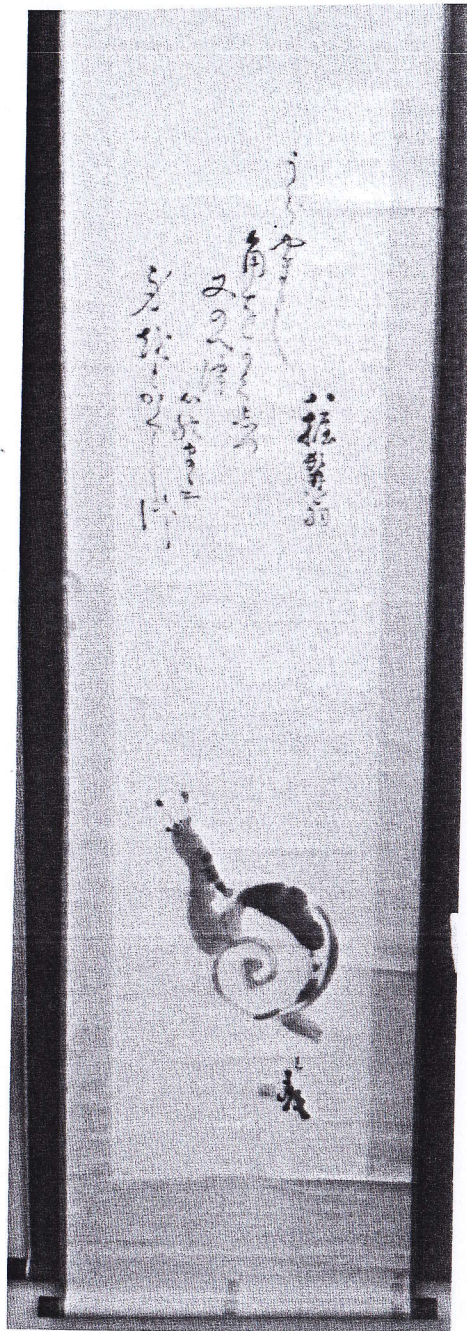
西郷はその後、善龍寺に保科八握髯翁墓を建て、これに室飯沼千重子位と彫らせた。神道では生前に自分の墓を用意することがある。なお、この墓は西郷家歴代の墓地とは別のところにある。

その後、西郷は一正の依頼で、貞雄に『かたつむりの歌』を贈っている。掛軸に角を伸ばしたかたつむりの絵とともに、筆でバランスよく字配りされた歌が書かれていて、全体が水墨画のようにまとめられ、一番下に落款が押してあり、東京板橋にある堀田文庫に保管されている。

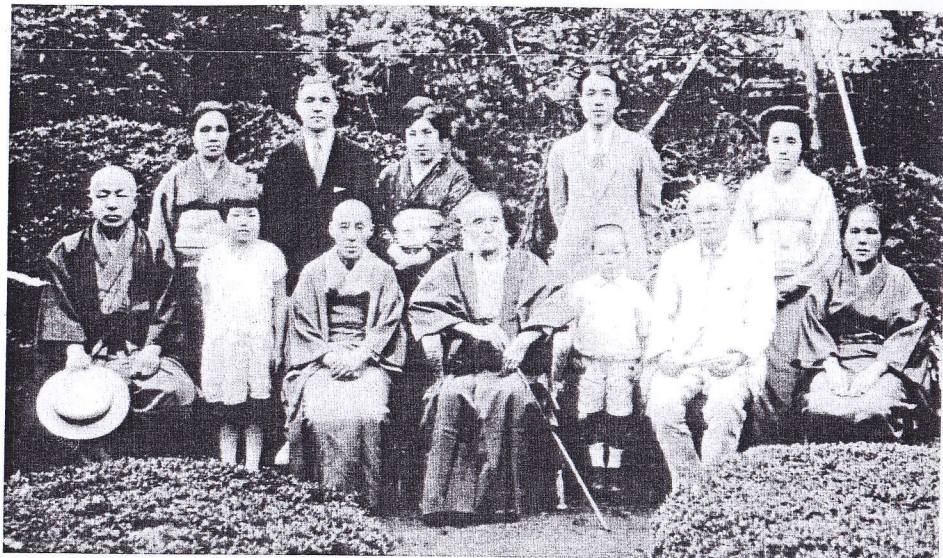
うらやまし 角をかくしつ 又のへつ
心のままに 身をもかくしつ

これは、「角を出したり、引つ込めたりして、自在に身を隠すかたつむりが羨ましい」という意味に解釈されるが、それでは、貞雄への贈り歌にはならない。どうも裏に何か隠されているように思われる。

一正は明治三十六年二月十三日に没し、四月二十八日には西郷がこれを追うように没した。そして、貞雄の長男一雄は明治三十八年七月、日露戦争終盤に樺太に工兵第十三大隊第二中隊工兵少尉として出征したが、一年後の明治三十九年九月、帰国して間もなく、札幌で死亡した。享年二四歳、死因は赤痢という。



西郷頼母（八握髯翁）が貞雄に贈った「かたつむりの歌」の掛軸（堀田文庫蔵）



喜寿の祝いでの記念写真。前列左から、松田一雄、飯沼富士子（一省長女）、れん、貞雄、一之（一省二男）、飯沼関弥、とよ夫人（西岡直太郎長女）。昭和5年仙台市光禅寺通り自宅中庭にて撮影。後列左から、関弥長女田鶴代、飯沼一省（関弥長男）、樗子夫人（南弘長女）、飯沼一精（貞雄二男）、松田浦路（貞雄長女）

貞雄が感冒に肺炎を併発し死んだのは昭和六年二月十二日で、訃報は翌日新聞に報道された。河

五 飯沼貞雄の墓

大窪山の墓地建立のために会津に帰ったのだから、関弥は全部で二〇基ある飯沼家代々の墓のレイアウト図を残している。この時には既に、両親も兄も他界しており、若松市上六日町にあった飯沼家は貞雄が相続していたが、住む人は誰もいない。貞雄はこれを若松市甲賀町の吉田昌明氏に売却したが、その土地建物売却証の契約日は明治四十四年八月三十一日となっている（『幕末・会津藩士銘々伝』佐藤一男）。

北新報は翌二月十四日付の朝刊一面に、「白虎隊唯一の残存者飯沼貞雄氏、宿病と感冒で遂に逝く 三時代に更生した国宝的存在」と題して、貞雄の教育な運命と後の功績を紹介する記事を写真付きで大きく取り上げた。その一部を以下に紹介する。

……飯沼貞吉少年も遅れてはならぬと脇差の鞘を払って咽喉深く突きさして悲愴な最期を遂げたにも拘らず、程なく蘇生して明治大正昭和の三時代に更生の道を拓し通信省に入って技師となり精勤数十年の勤務正五位勲四等に叙せられて大正六年功成り勇退して以来光禅寺通りの自宅に悠々自適の生涯を送っていた翁の長逝は、恰も国

白虎隊唯一の残存者

飯沼貞雄氏、宿病と感冒で遂に逝く

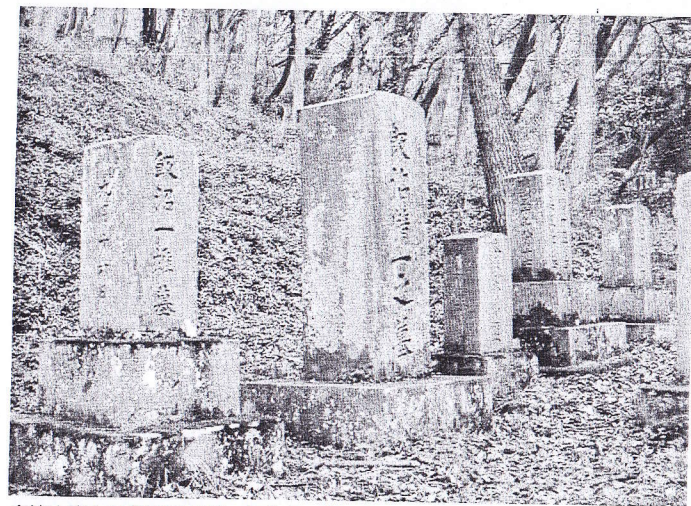
三時代に更生した國寶的存在

飯沼貞雄氏は、白虎隊の唯一の残存者として、明治大正昭和の三時代に活躍した。その功績は、通信省の技師として、そして、大正六年功成り勇退して以来、光禅寺通りの自宅に悠々自適の生涯を送っていた。その長逝は、恰も国

飯沼貞雄の追悼記事
（『河北新報』昭和6年2月14日）

四 会津大窪山への飯沼家墓碑建立

会津では「貞雄は自刃に失敗したことを恥じて、会津には一度も戻らなかった」というのが通説になっている。明治二十三年の白虎



会津大窪山の飯沼家の墓。左より一雄、精一、一正・玉章、一近

隊墓碑落成の時も、三三回忌（明治三十三年）のときも、飯盛山墓地拡張工事落成のとき（大正十五年）も、貞雄は参加しなかった。「自刃に失敗したことで、会津に戻るのがいやだったのだろう」という憶測が登場する背景にはこうした事情がある。しかし、これを「恥じて、一度も戻らない」とするのは誤解を招きかねない。貞雄は会津を嫌っていたのか、終生自分を恥じていたのか？ 貞雄は技術に誇りを持つことで再生し、生涯会津を愛した会津人であった。会津大窪山には長男一雄の墓がある。一雄の墓に並んで、飯沼家二代目精一、父母、兄の墓がある。そして、父母の墓には父の名前を「一正、母の名前を「ふみ」ではなく、雅号の「玉章」としている。これを見たとき、私はこの墓を作ったのは貞雄だと直感した。出陣の際に縫い付けてもらった玉章の歌は、貞雄が生涯忘れることができない強烈なものだった。

（貞雄の出陣するときによりてかわしける）

あずさゆみ むかふ矢先は
しげくとも
ひきなかえしそ 武士の道

貞雄は大窪山に墓を建てるために会津に行った。これを示唆する和歌が二つ残っている。（避暑）

東山 清き川辺に ゆあみして

夏にあつさも 忘れけるかな

これは、会津東山温泉に行ったときの歌で、時期は夏。

（汽車旅）

故郷の 空をあなた（遠い向う）

とながむれば

汽車の旅路も もどかしきかな

郡山―若松間の汽車が開通したのは明治三十二年。一雄が日露戦争帰還後札幌で死亡したのが明治三十九年、貞雄が仙台通信管理局工務部長となったのが、明治四十三年四月。福島はその管轄区である。そして、二ヶ月後松平容大公が卒去され、家令を努めていた弟関弥がその相続処理に奔走した。おそらく、その翌年の明治四十四年八月に、関弥とともに

宝を失った感がある。

晩年の翁 遺骸は北山輪王寺に埋葬
翁は生前極めて白虎隊の事蹟を問われる

ことを好まず、いや翁の謙讓な心境が当時の事情を誇らしげに語ることを好まなかったらしく、訪問者は勿論家族の者にさえ決して回顧談をしなかった、もう二十年も前の事であったが、飯沼家に仕えていた者（藤太のこと）が、たまたま熱心な客の質問にボツリボツリと當時を語り出すと、翁はホロリホロリと涙を流して「今更それを言つて何になる、もう話してくれな」と座に堪えぬ模様があつたそうだ、如何に深刻な思い出であつたかが察しられる。

翁の自刃した傷は既に癒えたが、盲腸炎に後半生を苦しめられた。手術後健康を回復し自適の生涯を送るようになってからは、松、さつき、菊の盆栽趣味囲碁などに閑雅な生活を楽しみ、晩年に至つてはそれも止めて、母堂の庭訓に倣つて和歌の道にこそし、号も昔を偲ぶ孤虎の名で選者点者の席に座ることもあり、雅懐が湧けば食事中でも箸を投げて手帳に認める事も度々あつた。最近に至つては便秘、下痢等交々起つて再び盲腸に膿を生じ食欲不進と

なり医師に対しても「もう俺の身体の機関はスッカリ碎けたのだ」とさびしく笑つていたが和歌の道は少しも倦まず、孫さんに口授しては絶えず東都の歌壇に近什をものされていた、翁自らの筆になるもので最後のものは二年前に建てられた会津烈婦烈女のためのなよ竹の碑であつた。

翁の詠じたもので有名なのは
すぎし世は夢かうつつか白雲の
空にうかべる心地こそすれ

の戊辰回顧と
皇太子殿下の白虎隊遺跡台臨の栄に感激
の余り詠じた
日の御子の御かげ仰ぎて若櫻
ちりての後も春を知るらん

なお、翁の葬儀は十五日午後一時市内北山輪王寺において執行、遺骸も同寺に埋葬さるる筈である。

生前貞雄と手紙のやり取りをしていた大沼郡会津美里町本郷の根本一氏は、一精からの連絡を受け、「形見の品は当然飯盛山の白虎隊墳墓に埋葬されるもの」と信じて、会津

云々となつていた。

「生き返るような切腹の仕方は会津武士らしくない」
「十五六歳の年齢ばかり並んだ墓に七十九歳というのは釣合わぬではないか」
「日清日露の戦いに生き残つた人々が今になつて死んだからと言つて靖国神社に祠らないと同じように公的に考えて厳密に言えば合祠することは考えものだ」

その後、根本氏は病を患い長らく床にあつたが、快復してから旧友の理事に経過を訊ねると、「そのことは全然問題にならなかつた」と言われ、大いに憤慨し、『会津会雑誌』第三八号（昭和六年五月発行）に「飯沼貞雄翁の遺髪と義齒」と題する論考を寄稿した。文章の一部を下記に紹介する。

ものは見方と解釈に依るものである。遙かに鶴ヶ城を臨み見て、君公の跡を追はんものと一同揃つて殉死を決行したるは、死して護国の鬼となり、

七生報国の尽忠至誠に出でたるものなり。奇跡的残存は、それとは別問題である。寧ろ、翁が偶然老嫗のために蘇生されしは会津のための好方便と言ふべきで、もし翁の蘇生がなければ殉死当時の壮烈な状況を誰が知り得たであろうか？伊国の奇傑ムッソリーニをして、会津白虎隊は世界的武士道の鑑なりと激賞さ

飯沼氏の合祠 地元では反対

既報白虎隊の生存者で過日仙臺市で死去した飯沼貞雄翁（七九）の白虎隊墳墓の合祠に就ては目下地元（若松市方面）の關係者間には是非を論じられてゐるが各方面の意向をたゞすと現在白虎隊の碑と並んで翁の碑を建てることは相當反對する人が多く、合祠説は合祠説としてその儘に終る模様に只仙臺市の遺族の希望によつては遺髪などを飯盛山の一部分に葬るとなるらしい會津市靈柩會野村理事は語る

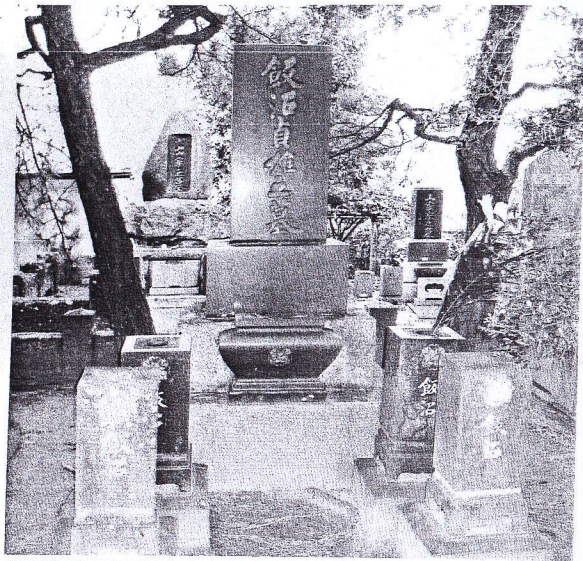
合祠反対記事（『会津日報』昭和6年2月24日）

甲靈義会の理事に問い合わせたところ、「その件は重大な問題であるから、理事会協議の上決定する」との返事を受け取つた。

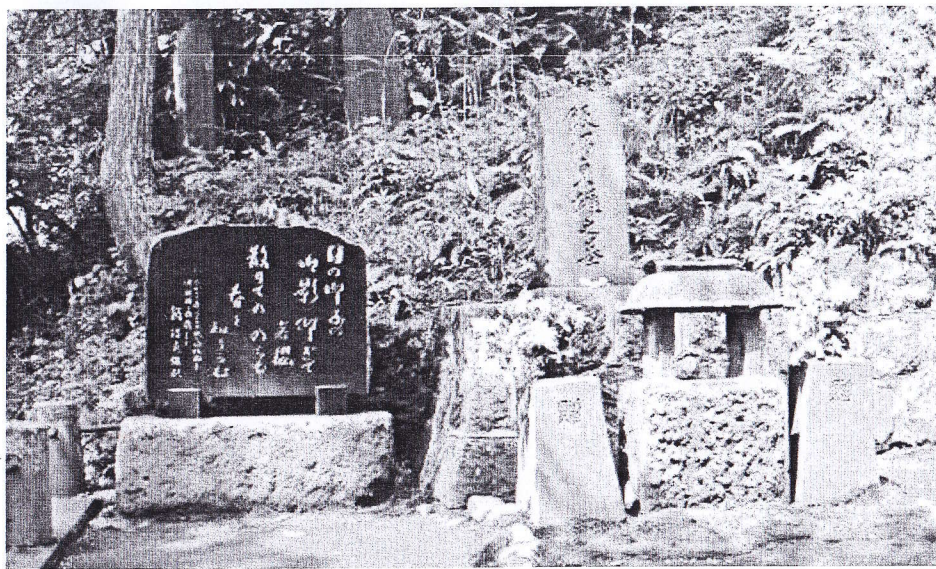
だが、二月二十四日付の「会津日報」に、貞雄の白虎隊墳墓合祀に反対の記事が報じられた。その記事は、「甲靈義会の方で合祀運動を起しているとは、何かの間違ひだ」とし

れるに至りしは、全く翁残存の賜ものと言ふべし。飯沼翁の殉死決行当時の心事は、他の白虎十九士と些かも異なることなく、単に蘇生せるを以て区別を為すことなど出ない。かの月照（西郷と共に投身自殺した僧）と薩摩の海中に投じて蘇生した西郷隆盛が帝都上野に銅像を建てられ、祭られしは何ぞや。嗚呼、鮮血淋漓たる姿を一老嫗の肩に助けらるる白虎飯沼少年の絵はがきを見て同情し、崇敬の念を抱くものであるのに、誰が白虎隊墓地への埋葬に反対するといふのか。

輪王寺の福定無外和尚が貞雄の墓を完成させたのは、昭和七年三月だった。輪王寺は曹洞宗で、神道ではないが、伊達家九代政宗の夫人の所願により、福島県梁川に創建されたのが始まりである。伊達氏の居城は、梁川・西山・米沢・会津・岩出山・仙台と変わり、輪王寺もこれに従つて転々とし、仙台の地に移つたのは十七代政宗の慶長七年（一六〇二）で、以後三百余年の間、伊達家の庇護の下に北山五山の筆頭格として栄えた。明治維新以後、伊達氏の庇護を失つた輪王寺は、明治九年（一八七六）野火に類焼し、仁王門



飯沼貞雄の墓（仙台市北山輪王寺、昭和7年建立）



飯沼貞雄の墓（会津飯盛山、昭和32年建立）

のみを残して灰塵に帰し、山内は荒廃したが、貞雄が仙台に着任した明治三十六年（一九〇三）に本山から派遣された福定無外和尚が辛苦十余年、寝食を忘れて再建に努力し、大正四年（一九一五）、本堂と庫裡を完成させ、その後見事なまでに美しい庭園を建設した。

貞雄の戒名は「白巖院殿孤虎貞雄居士」とされ、『白虎』と貞雄の雅号『孤虎』が織り込まれている。無外和尚は墓誌に貞雄の略歴を刻み、白虎隊を称える漢詩を添えた。

飯沼貞雄の墓は、現在、会津飯盛山の白虎隊十九士の墓と自刃の場の間にあるが、この墓ができたのは没二六年後である。昭和三十三年九月二十二日から三日間にわたって明治戊辰戦役九十年祭が催された。会津若松市と西軍墳墓

史蹟保存会から、かつての西軍関係各県にも案内状が送られ、山口県からは知事を含め数人が参加した。知事一行は白虎隊墓所に参拝し、鶴ヶ城址の東西両軍殉難者合同慰霊祭に臨んだ。当時、会津会会長を務めていた飯沼一省氏（関弥長男）は、「山口県知事がお見えになったことは、何といっても悦ばしかった」と語っている。

九月二十四日、飯盛山に飯沼貞雄の墓碑が建てられた。建立したのは前島会（郵便の父といわれた前島密の精神を伝承する会）で、墓地は鶴ヶ城が見える場所を飯盛山主の飯盛氏が提供した。揮毫は旧藩主宍保公孫の松平勇雄氏（参議院議員、福島県知事）で、飯沼一精・弘子は貞雄の遺言どおり、遺髪と義齒をここに納め、貞雄が掘った仙台市の自宅の井戸から水を汲んで持参し、墓にかけた。墓の隣に建てられた記念碑には以下の碑文が彫られている。

飯沼翁は、戊辰役に当り、白虎隊の一員として、この地に自刃せるも唯一人の蘇生者となり、白虎隊の忠烈果敢な行動を世に伝う。

後、通信事業に挺身し、碇子の考案事業に対

する貢献多大のみならず、翁の清廉にして高潔なる人格と生涯は、後生事業人に尊い教訓を与え、洵に崇敬に堪えず、茲に翁ゆかりの故山に墓碑を建立し、謹んでその霊を弔う。

君と十九人の同士は泉下に手を執り合い満足の笑みを交わしていることであろう。

昭和三十三年九月二十四日

財団法人前島会仙台支部

墓碑除幕式は、松平勇雄氏をはじめ、横山会津若松市長、最上英子政務次官、飯沼一省氏（元東京都長官）、弔霊義会専務理事、前島会長、そして旧通信省関係の仙台郵政局長、東北電気通信局長など、多数の人々の参列のもと、盛大に行われた。

この時の様子が『会津史談会誌 第三三号』に掲載されているので、一部抜粋して紹介する。

死ぬべきに死ぬ事が武士の道とされている時代に生き残った貞吉の心中は、余人には推し量られぬ苦しみがあったことであろう。然し貞吉は後貞雄と改名し生きて国家の為に幾多輝かしい業績をつみ、人間としての責任を完うした。（中略）

斯の如き盛大な式が行われようとは、地下

の霊は予期しなかつた事であろうが、若し今これを知るならば、定めし感涙にむせんだ事であろう

貞雄没後間もなく、白虎隊墳墓合祀反対の記事が「会津日報」に掲載されてから二六年、貞雄は自刃した白虎隊士の一員として正式に認められたのである。

貞雄の和歌の師であつた秋月まし子女史が、このとき詠んだ歌がある。

よみかえり白虎隊士のふるまひを
あらはにせしは神のみわざか

人の臣の君につかふるまごころを
世に示されぬ天にかはりて

母刀自の教へのみうた身にしめて
たどりましけん敷島の道

※母刀自：母親のこと
※教へのみうた：梓弓の歌のこと
※敷島の道：歌の道のこと

昭和六十三年秋、戊辰百二十年に当たり、飯盛山の飯沼貞雄の墓地に「日の御子」の歌碑が建てられた。建立発願は会津本郷町の町会議員の方々で、揮毫は当時衆議院議員であ

った大沼郡金山町の滝沢幸助氏。発起人には早川廣中氏（元会津若松市長、白虎隊記念館長）、飯盛正日氏らの名前がある。会津本郷焼を、電信用磚子として、通信省で大量調達した時の貞雄の貢献がこのような形で評価されたのであろう。

七、むすび

会津藩は終始一貫して、天皇および徳川家に至誠を尽くしてきた。それが、幕末期に京都守護職を引き受け、孝明天皇に至誠を尽くし、その信頼を得たが故に、長州の陰謀により、「朝敵」とされ、会津戦争で三〇〇〇人の犠牲者を出し、埋葬も許されず、厳寒不毛の地に集団流罪となつた。敗戦後の会津人の生き方を見ると、表街道組、裏街道組と中道組に分かれる。山川浩・健次郎兄弟、柴五郎、出羽重遠、高峰秀夫、日下義雄らは表街道組、西郷頼母、永岡久茂、伴百悦、日向内記らは裏街道組、そして、広沢安任、秋月梯次郎、町野主水らを中道組とすれば、貞雄はこの中の一人に位置づけられるだろう。貞雄は表と裏の両方を経験しながら、「ならぬ

明治年	月給(円) 一部推定		
	貞雄	関弥	健次郎
12	20	3	100
16	27	12	175
26	50	15	215
32	75	25	250
35	100	28	330
40	150	30	400

給料比較表

ことはならぬ」に象徴される『義』を大切に、その生涯を通信技術に捧げたと思う。そして、ここに挙げた会津人は全て、『義』に生きたと思う。

貞吉と健次郎は従兄弟同士だが、同じ年に生まれ、

同じ年(昭和六年)に死んだ。貞吉は生年を一年ごまかして一六歳と申告し、背が高かったのが白虎隊に入れたが、健次郎は白虎隊に入らず幼年組となり、その後の運命が分かれた。貞雄は、明治十四年に広島藩士松尾鑑太郎長女れん(二一歳)と結婚した。れんの母は伊予西条藩士の娘。同じ年に健次郎は元唐津藩士(佐賀県唐津市)丹羽新の次女(二七歳)と結婚している。幕末・明治・大正を生き抜いたこの二人の比較は、歴史研究上興味深い。参考までに、二人に関弥を加えた三人の給与を比較して表に示した。明治期の給与格差は現在より遥かに大きいことが分

かるとともに、彼らの行動半径に影響したのは当然である。

飯沼貞雄は飯盛山で自刃した白虎隊士の中で唯一蘇生するという歴史上奇な運命を背負ったが、生涯に亘って寡黙を通したために、様々な誤解が生じた。また、その生涯はよ



れん(貞雄夫人)肖像画

く知られていなかった。本稿では、これらの部分に焦点を当てて調査した結果をまとめた。

内容的には些細なことも、重要なことも混在していると思われるが、今後の歴史研究の一助となれば幸甚である。

【参考文献一覧】

★は入手が比較的難しいと思われるもの

- ★『榎崎頼三陣中日記』榎崎頼三 明治元年十二月 榎崎豊資による写本は明治二十二年十月
- ★『心情新話』明治二年四月二十八日 天理可楽第三号 官許新聞
- ★『白虎隊事蹟』飯沼貞雄君の事蹟 中村謙 明治二十七年六月 河井源蔵編 国会図書館
- ★『通信省職員録』通信省 明治二十七年五月版 国会図書館
- ★『渡部家文書』渡部ムメの口述を飯盛正信が筆記 明治三三年三月二十五日 私文書
- ★『会津藩白虎隊隊末記』飯沼貞雄・原新太郎 明治三十五年十月 私文書(未公開)
- ★『通信省職員録』通信省 明治三十五年十二月版 国会図書館
- ★『飯沼貞雄談』河北新報社 明治四十四年三月二十七日、七月三日
- ★『会津戊辰戦争』平石升蔵 丸八商店出版部 大正六年(昭和四年増補版)
- ★『白虎隊の人員』飯沼貞雄 大正六年 私文書(未公開)
- ★『補修 会津白虎隊十九士傳』宗川虎次著 山川健次郎補修 大正十五年 会津市書芸会
- ★『白虎隊生存者飯沼貞雄の蘇生実話』芳山史哲 大正十五年一〇月二十八日 新東北第一七卷一九〇号
- ★『戊辰会津戦争回想談 其一』三河原勝治 昭和二十三年 会津会雑誌二一、二三三三
- ★『白虎隊の真相』(生存者飯沼翁遺稿談) 富田廣重 昭和五年十一月十五日 東北の秘史逸話 第二号
- ★『飯沼貞雄の遺髪と義齒』大沼郡本郷町 根本一 昭和六年 会津会雑誌三八号
- ★『男爵山川先生遺稿』男爵山川先生記念会編 昭和十二年 岩波書店
- ★『澤少卿』飯沼関弥一寿 昭和十三年 私家版
- ★『飯沼貞雄の電信線架設に就いて』八木鐘次郎談 昭和一八年 会津史談会誌二三号 会津史談会
- ★『鶴ヶ城を陥す』凌霜隊始末記 藤田清雄 昭和三十一年 謙光社
- ★『井深堀之助とその時代 第一巻』井深堀之助とその時代刊行委員会編 昭和四十四年 明治学院
- ★『会津本郷の歩み』福島県商業協同組合 一九六九年
- ★『ある明治人の記録』石光真人 昭和四十六年五月二十五日 中央公論社
- ★『勝海舟の参謀 藤沢志摩守』安西 ユウ 昭和四十九年七月二十日 新人物往來社
- ★『史実会津白虎隊』早川喜代次 昭和五十一年 新人物往來社
- ★『飯沼貞吉救助の実証を追って』秋月一江 昭和五十二年五月 会津史談会五〇号 会津史談会
- ★『文部大臣 高見三郎傳』小杉の巻 浦上 豊 昭和五十六年九月十日 私家版
- ★『会津白虎隊』(戊辰戦争一〇〇年記念出版) 昭和六十二年五月十日 歴史春秋社
- ★『絵物語 少年白虎隊』宮崎十三八・菊池幸樹 昭和六十二年九月二十二日 歴史春秋社
- ★『札幌にいた白虎隊士』飯沼貞吉 金山徳次 平成一年八月二十三日 限定出版
- ★『戊辰戦争実証談』酒井峰治 平成一年発行 平成五年白虎隊記念館寄贈
- ★『幕末の会津藩家老 西郷頼母』堀田節夫 平成五年十月二十五日
- ★『会津將軍山川浩』星亮一 平成六年五月十五日 新人物往來社
- ★『てれこむ!夜明ヶ』岩井登・高橋雄造 平成六年六月一日 電気通信振興会
- ★『飯盛山の盗賊』中村彰彦 平成七年 週間新潮 読切時代小説
- ★『飯沼貞雄と榎崎頼三のこと』金本利雄 平成九年七月十一日 蒙談第二四号 蒙談会
- ★『恩愛の絆』堀田節夫 平成九年七月十一日 蒙談第二四号 蒙談会
- ★『恩愛の絆』補 堀田節夫 平成九年十二月二十五日 蒙談第二五号 蒙談会
- ★『長州藩士榎崎頼三と白虎隊士飯沼貞吉』金本利雄 平成九年十二月二十五日 蒙談第二五号 蒙談会
- ★『流れる五戸川』おらが村の会津さま 平成十一年十月十日 三浦榮一 青森コロニー
- ★『国際通信の日本史』石原藤夫 平成十一年十二月二十日 東海大学出版会
- ★『海老名李昌・リンの日記』玉川芳男 平成十二年二月二十九日 歴史春秋出版部
- ★『会津白虎隊のすべて』小松山六郎 二〇〇二年二月十日 新人物往來社
- ★『恩愛の絆(会津と長州)』田村幸志郎 平成十四年五月二十八日 蒙談第三四号 蒙談会
- ★『飯沼貞吉について』佐藤一男 平成十四年五月二十八日 蒙談第三四号 蒙談会
- ★『会津少年郡長正自刃の真相』宇都宮泰長 平成十五年八月十五日 鶴和出版
- ★『幕末会津藩士銘々伝(上)』小松山六郎・間島勲編 平成十六年 新人物往來社
- ★『白虎隊自刃蘇生者飯沼貞吉の生涯』花見詮 会津史談会誌七八号 平成十七年五月 会津史談会
- ★『山川家の兄弟 浩と健次郎』中村彰彦 平成十七年十一月十一日 学陽書房
- ★『帰る雁が称』私注 会津藩老・西郷頼母の晩年の日記 堀田節夫 平成十九年
- ★『なお、★印のうち主な文献はWEBサイト「白虎彷徨」に掲載してある。』